

旅行
案内
佛
印
事情
日本
旅行
協會

29231
N776

292. 31-N776ㄅ



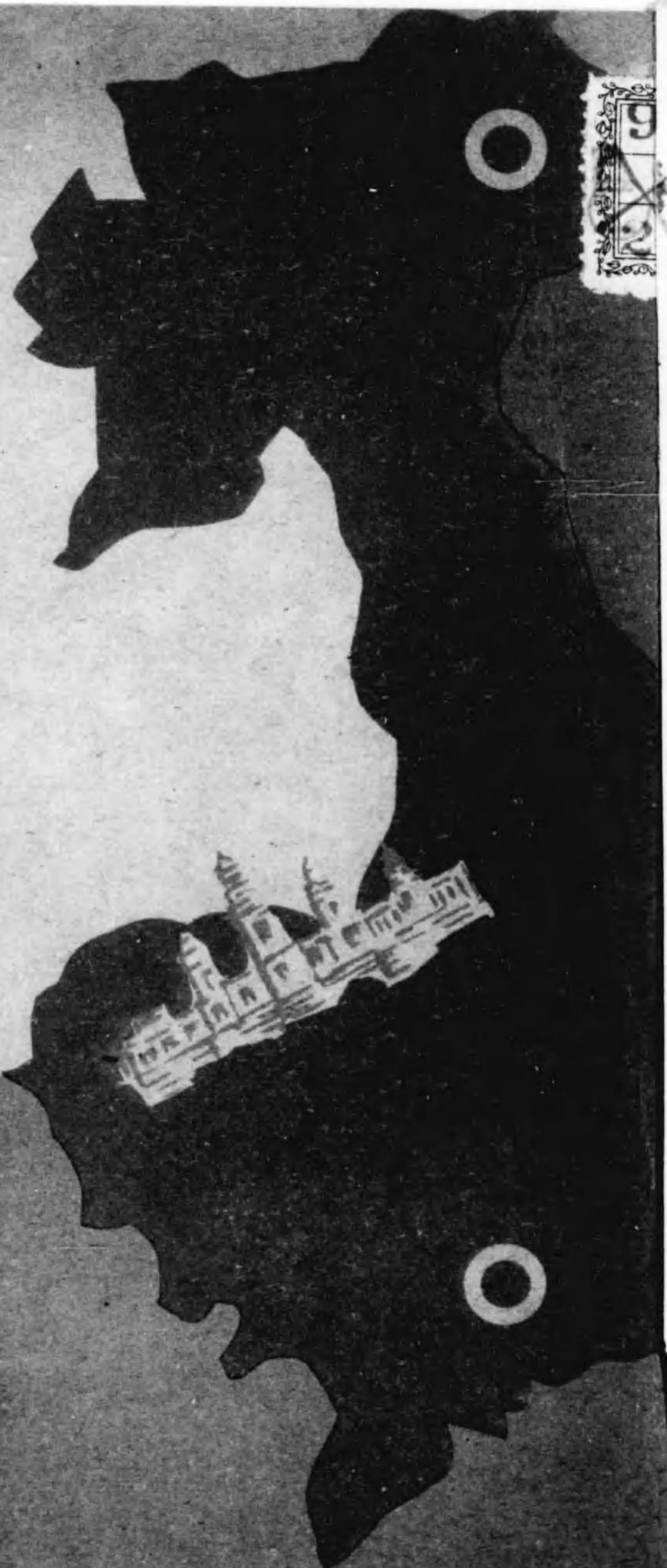
1200500733483



始



旅坊
案內佛印畫情



292.31
N776



案旅
內行
**佛
印
事
情**

日
本
旅
行
協
會



はしがき

最近、南方政策、南進國策と言ふ言葉が我國朝野各方面に於て盛んに用ひられる様になつたが、従来南洋方面に動もすれば無關心であつた我國民にとつて之は甚だ慶ぶべき事である。然し乍ら蘭印のみが右政策又は國策の對照區域であつてはならない。佛印も亦本區域の一部分たる資格を充分に有するものである。日本軍の佛印進駐以來、佛印に對する一般の關心は益々高潮して來たと云へ、遺憾乍ら尙我國民の佛印に對する認識はまだ不足して居る。今こそ吾々日本國民全體が、蘭領印度よりは遙かに日本に近く、臺灣からは指呼の距離に位置する天然資源豊富な廣大なる未開植民地を認識すべき秋ではあるまいか。此意味に於ても日本の資本家・事業家・商工業者は固より學者・學生等凡ゆる有志家が佛印視察に、研究に、觀光にどしどし出掛けて行くべきである。たゞ茲に此等有志家の爲に遺憾に堪へぬ事は佛印旅行案内を目的とする邦書の未だ皆無なることである。最近、佛印に關する著書も數多く上梓せられたが、眞に佛印旅行を志す人々の伴侶として出版されたものがない。則ち本書はこれ等有志家の視察旅行に何等か資するところあるを期して編纂したものである。

茲に特に斷つて置き度いのは本書内容の一半は佛印在留邦人一有志家の執筆にかゝり、二半は日本旅行協會河内出張所を経て蒐集せる資料に依り編纂したものである。

最後に本書の要項を掲げて此の「はしがき」を終へる。

一、本書の目的とする所は佛印視察を志す本邦人に對して専ら佛印事情を紹介するにある。従つて從來の旅行案内各書とは趣を異にする處また多いと信ずる。

一、本書の内容(地圖を除く)殊に統計數字は泰佛印紛争調停に關する東京會談前のものである。一、限られた紙數と匆々の間の記述は、時に簡に失し又誤謬の點なきを保し難い。此等の諸點は大

一、佛印觀光旅行に關する各種の照會は、日本旅行協會(ジヤパン・ツーリスト・ビュロー)各地案内所、河内出張所又は西貢所在の印度支那中央觀光局(Office Central du Tourisme Indochinois 22, Rue Lagrandière, Saigon)へ照會されるか、又は河内日本總領事館又は河内日本領事館宛なされた。

* (その他、河内所在の印度支那北部觀光組合聯合 Union des Syndicats Touristiques du Nord. Indochine. Galerie du Crédit Foncier, Rue Paul Bert, Hanoi 順化所在の安南理事廳觀光局 Bureau Officiel de Tourisme Résidence Supérieure, Hué, Annam)

昭和十六年四月

目次

はしがき 一

前編 二

一 佛印大觀 一

二 佛印の經濟は何で立つて居るか 六

三 佛印の外國貿易 七

四 日本と佛印 八

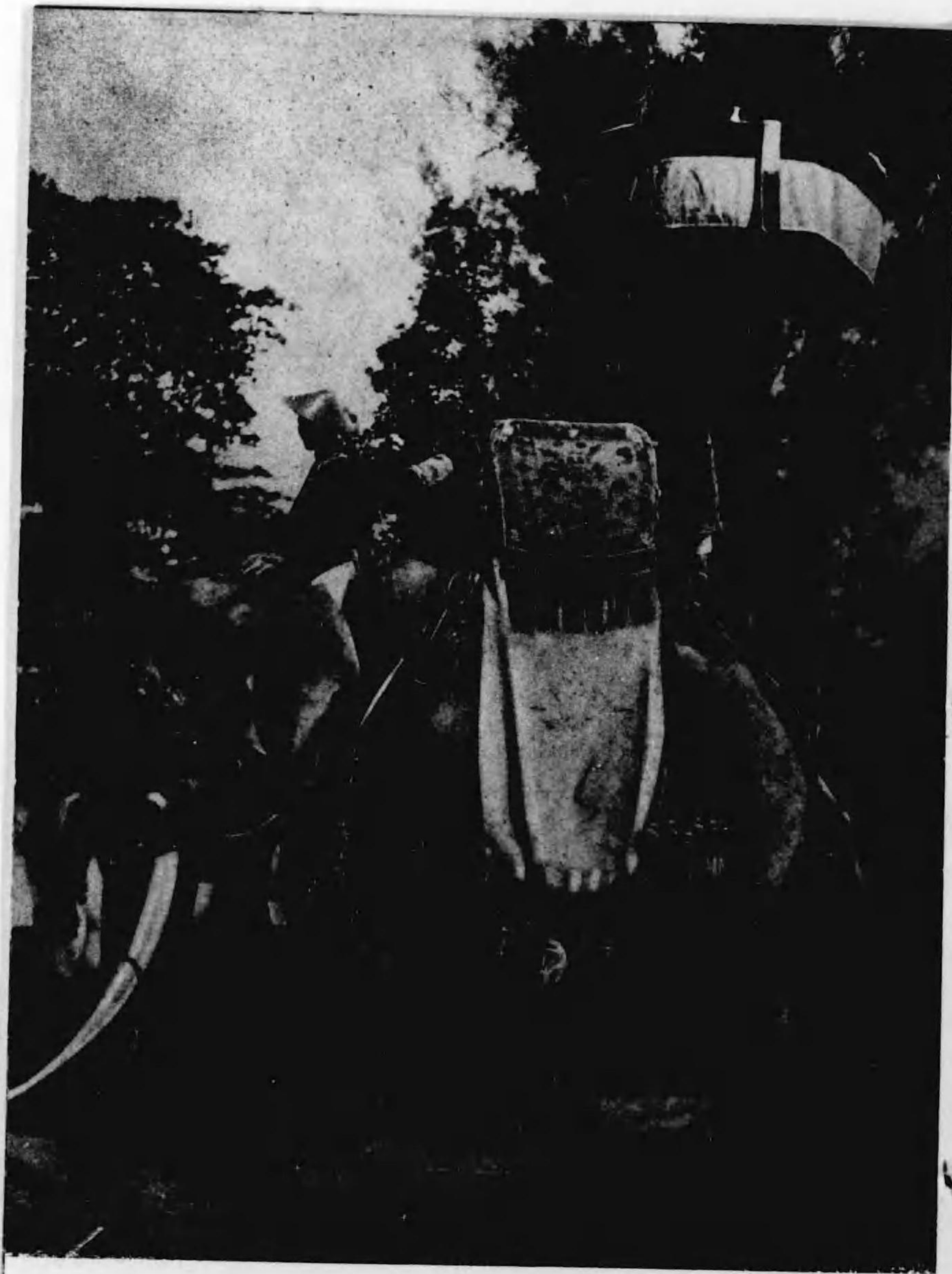
五 佛印在留日本人 一一

後編 一三

一 氣候 一五

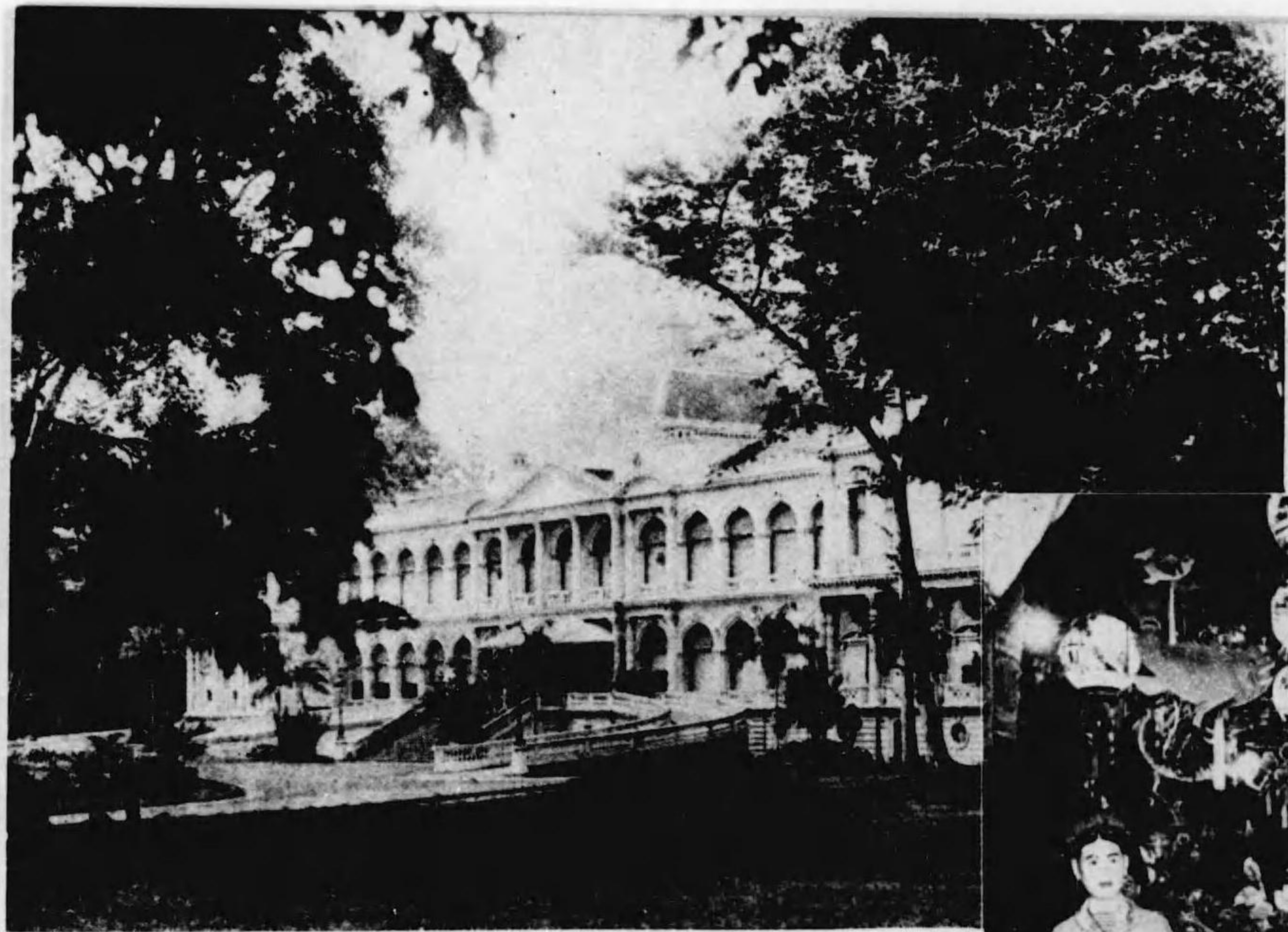
二 旅行季節 一六

三 渡航手續 一七



王宮飼育の象(顯化市)

四 本邦からの連絡航路	一八
五 一般的注意事項	二〇
六 通用言語と新聞	二四
七 通貨と通信	二六
八 衛生状態	三三
九 主要都市及び観光地	三七
一〇 ホ テ ル	四九
一一 交 通	五九
一二 佛印領内旅行徑路	七四
一三 佛印中心隣接國交通事情	八三
一四 本邦から南方諸國廻遊參考旅程 附 費用概算	八六
一五 在佛印諸會社、銀行所在地	九四
地 圖 (佛印位置圖、佛印觀光地圖) 寫眞 (十六頁) 及地圖	九四

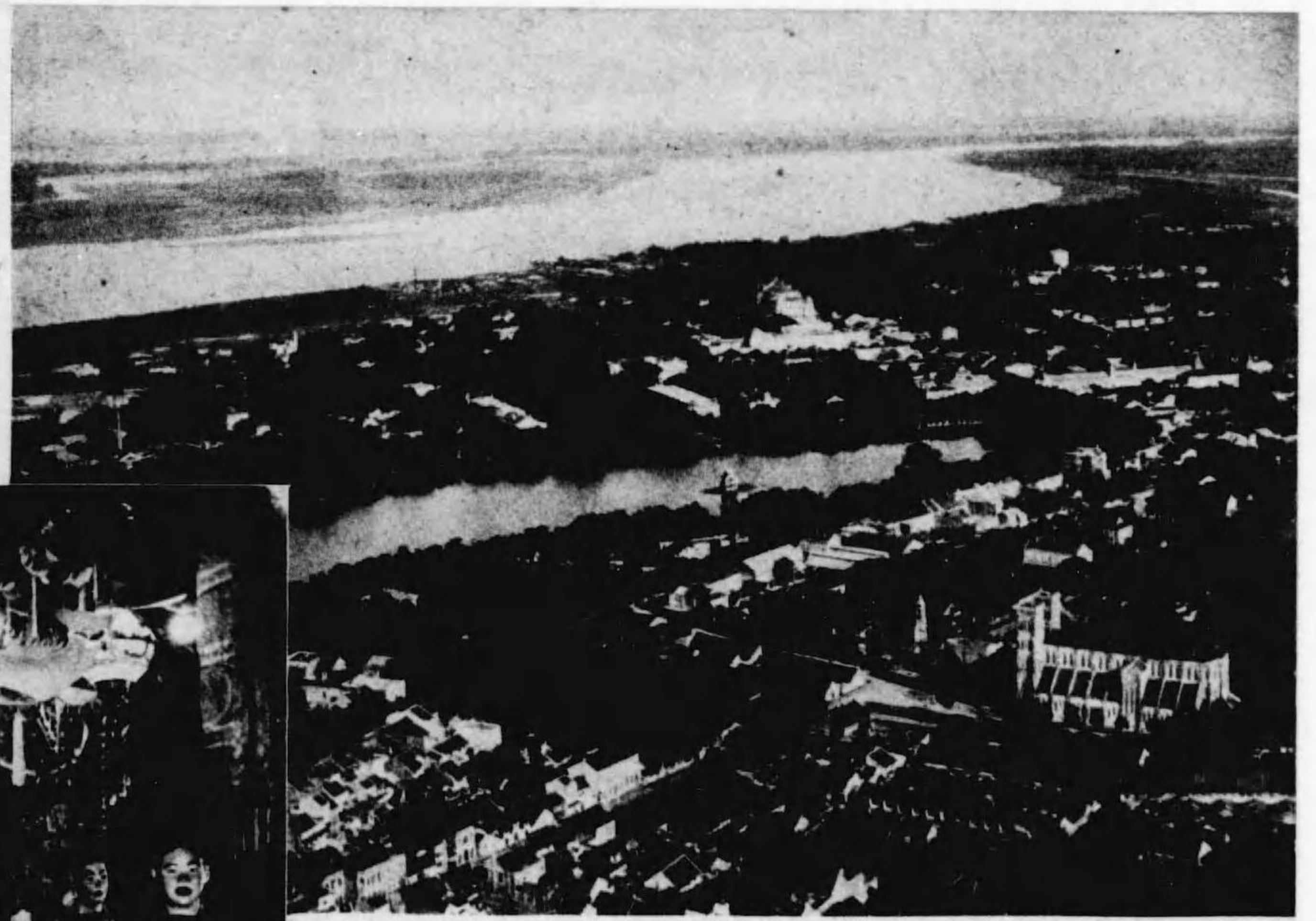


荷印總督府(西貢市)

青年男女が對座して即興歌を交換する年頭行事(ルアンブラバン)



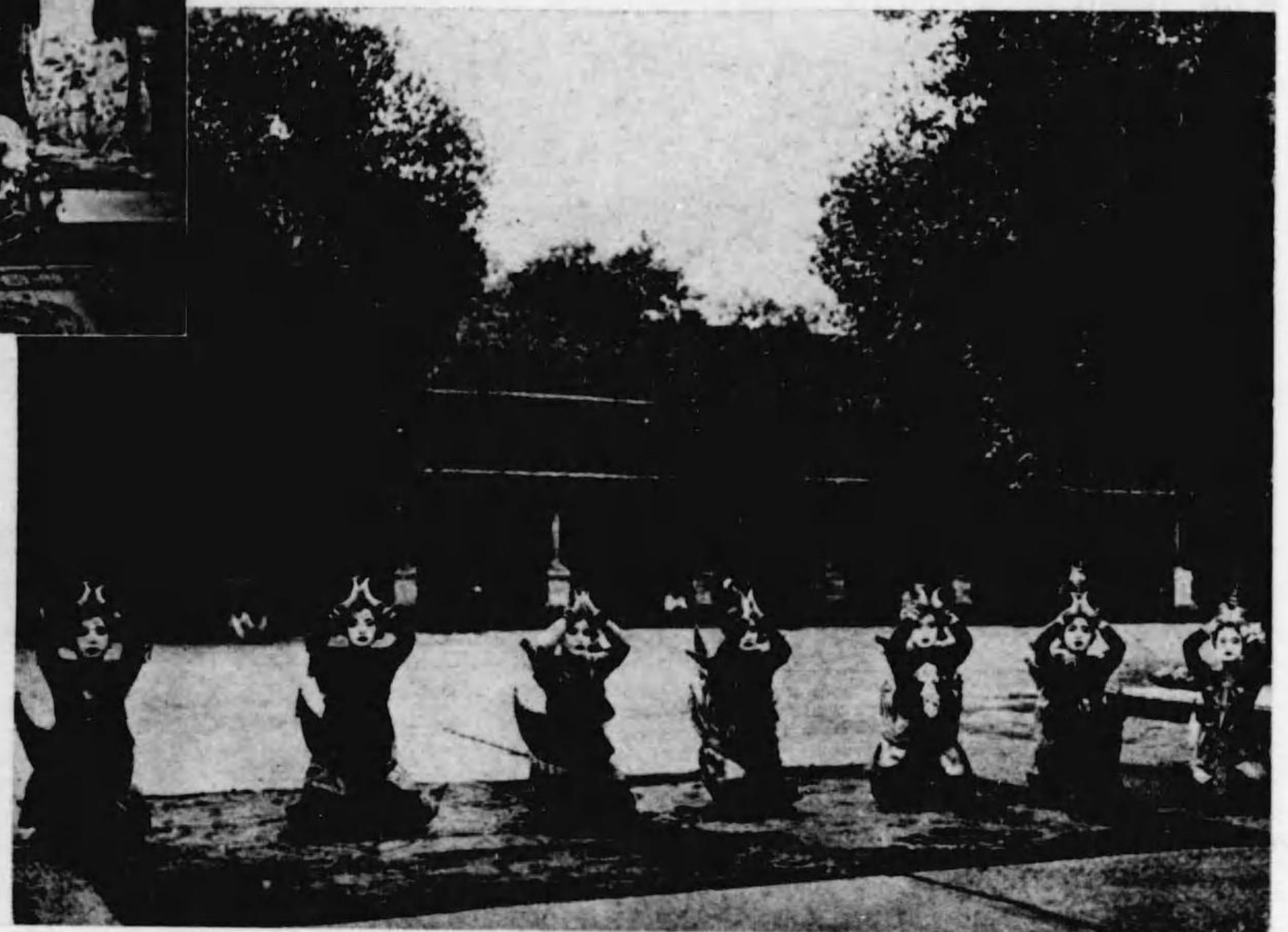
代表的佛壇



河内市全景



宮廷舞踊(カンボヂヤ)





★ アロン灣は東京地方の海岸にあり、多くの島嶼を基布する内海をなし、島嶼に奇形多く、岩に奇麗多い景勝をなしてゐる ★



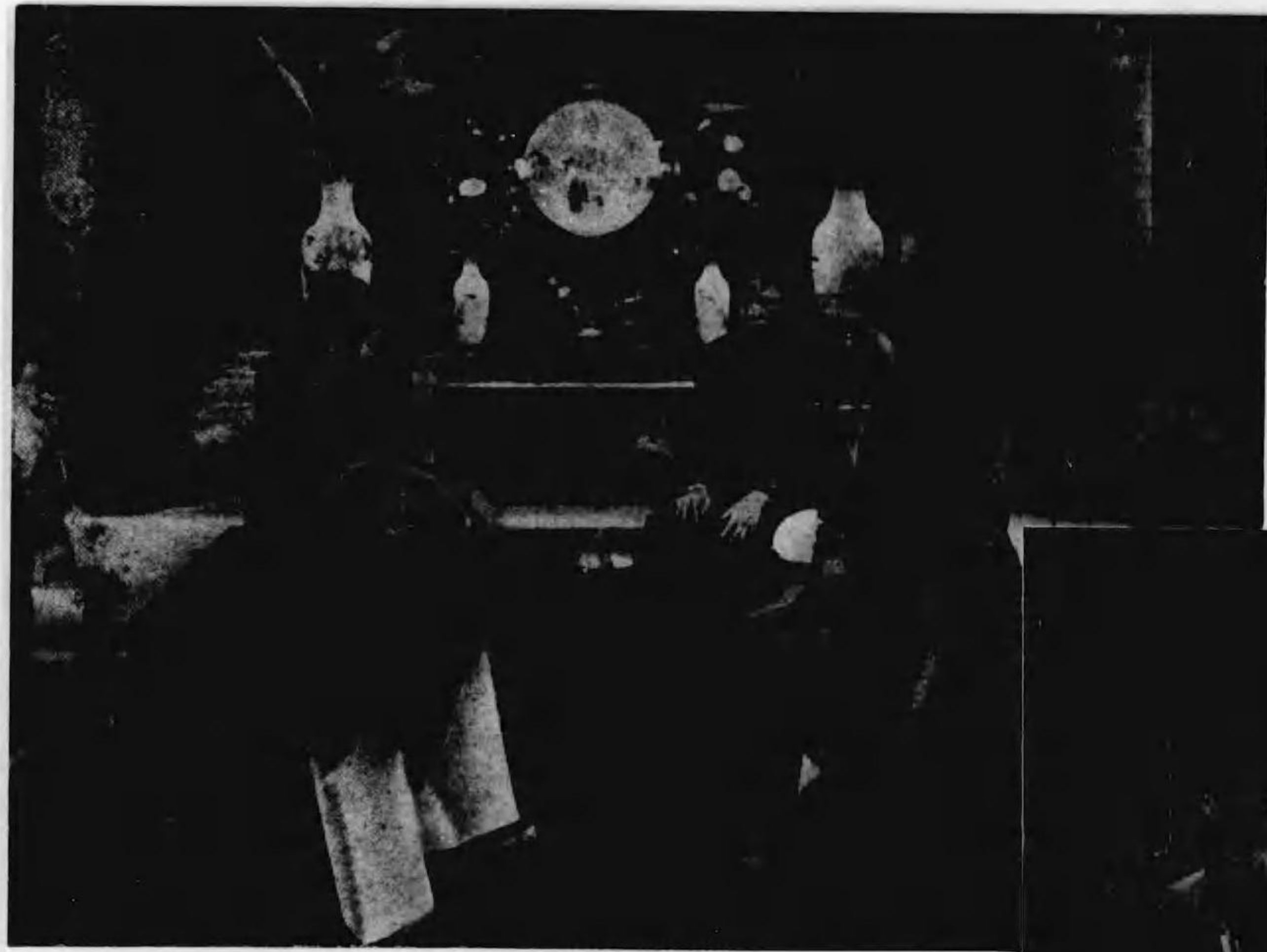
↑ コンガイ附近 (アロン灣)

奇巖 (アロン灣)



ホングイ附近 (アロン灣)
漁村 (アロン灣)





上流家庭風俗(安南)

安南への入口



順化市の官吏



カ、オの精出(安南地方)

モイ族の米搗き





モイ族の耕作



水上生活(紅河)



プチ・ラツク(小湖)風景(河内市)

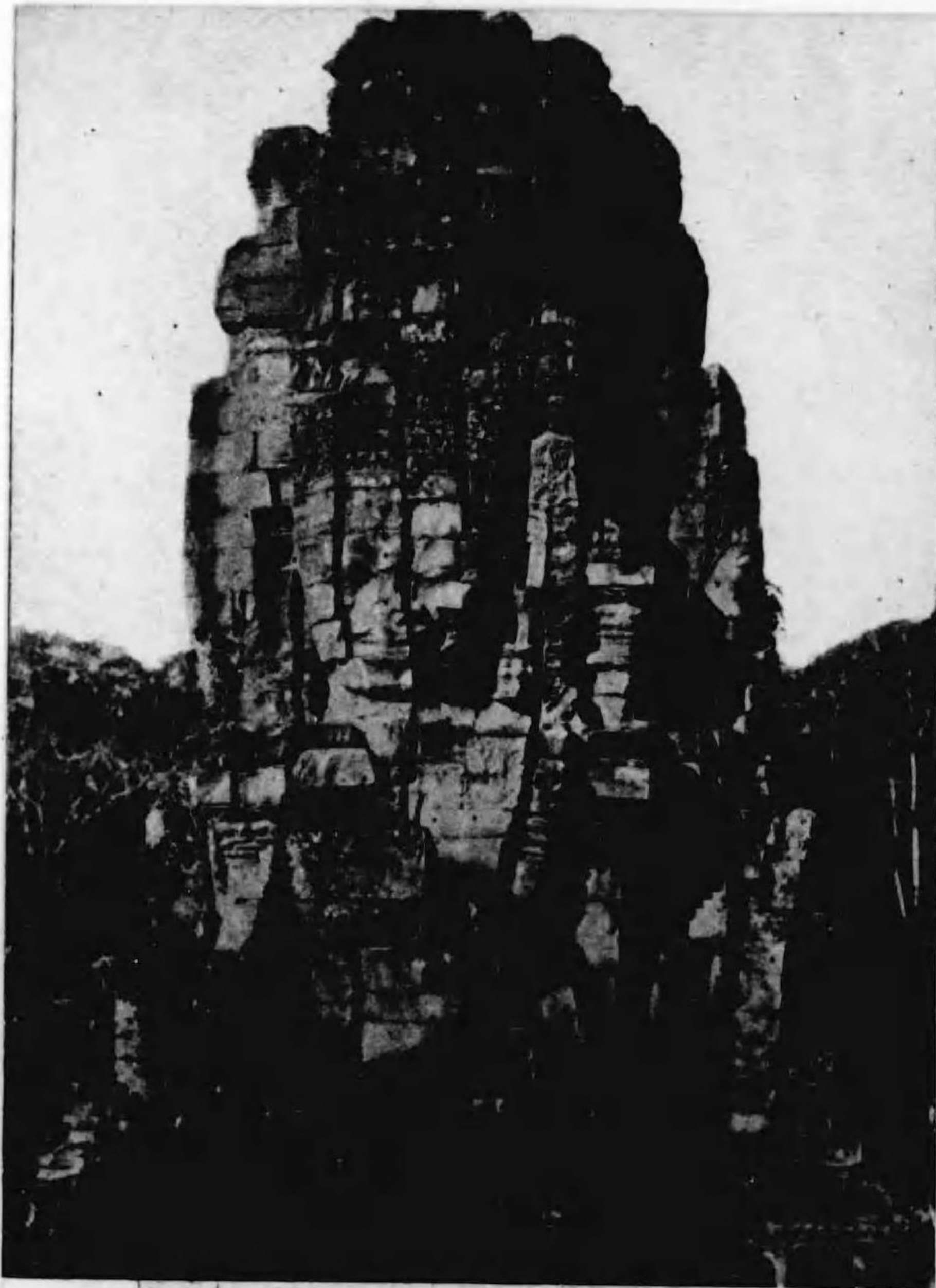
ランソンの田植(東京地方)



インド・オレンチの市場
(東京地方)

虎狩の獲物(安南地方)





←バイオンの塔
↓入口に立つ



★アンコール

第三の城郭→
漁師の子供

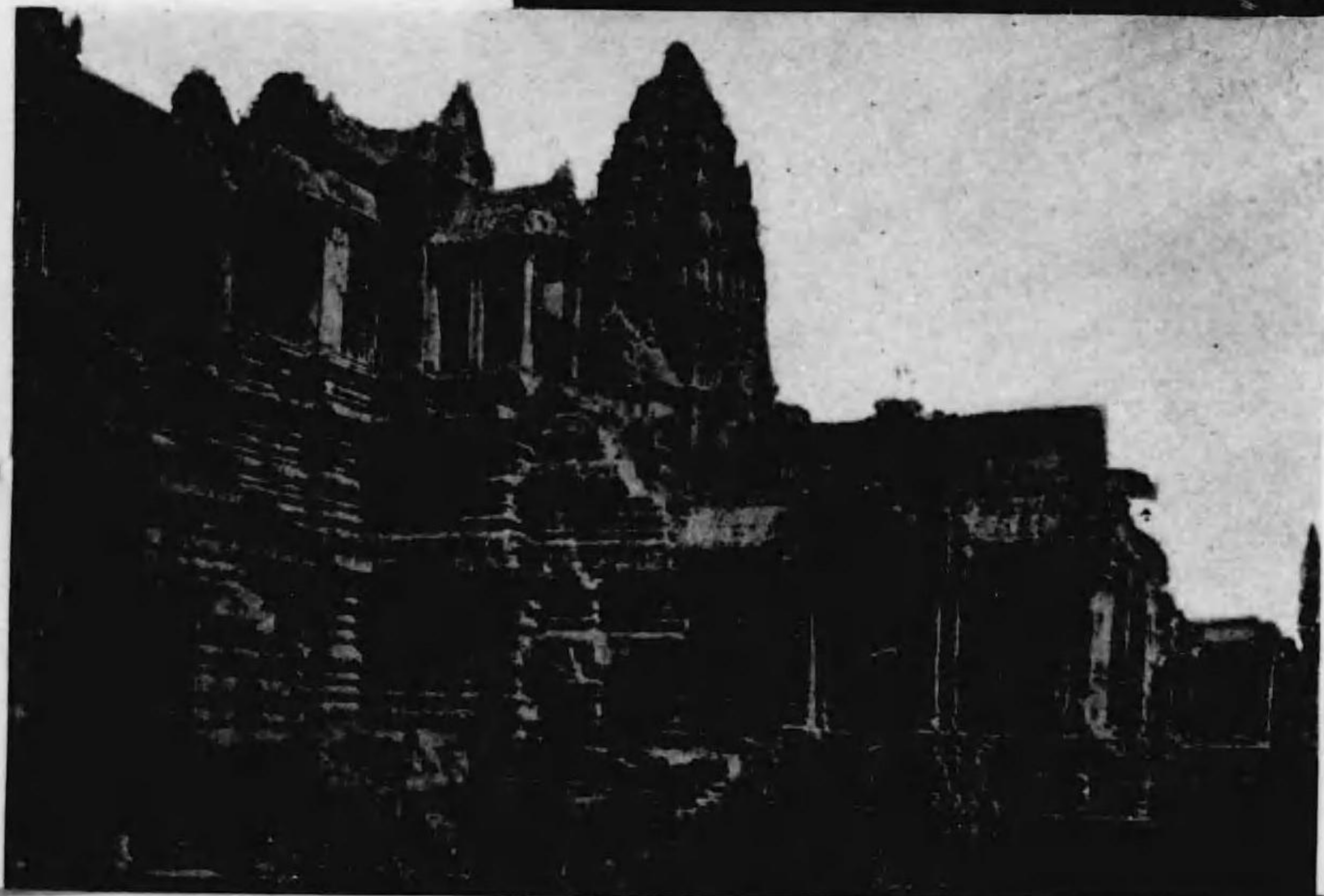


の遺跡★

→中央宮殿



←第一の城郭





トラヴィンの塔
 (交趾支那地方)
 ナガスの橋 (フノムベン)

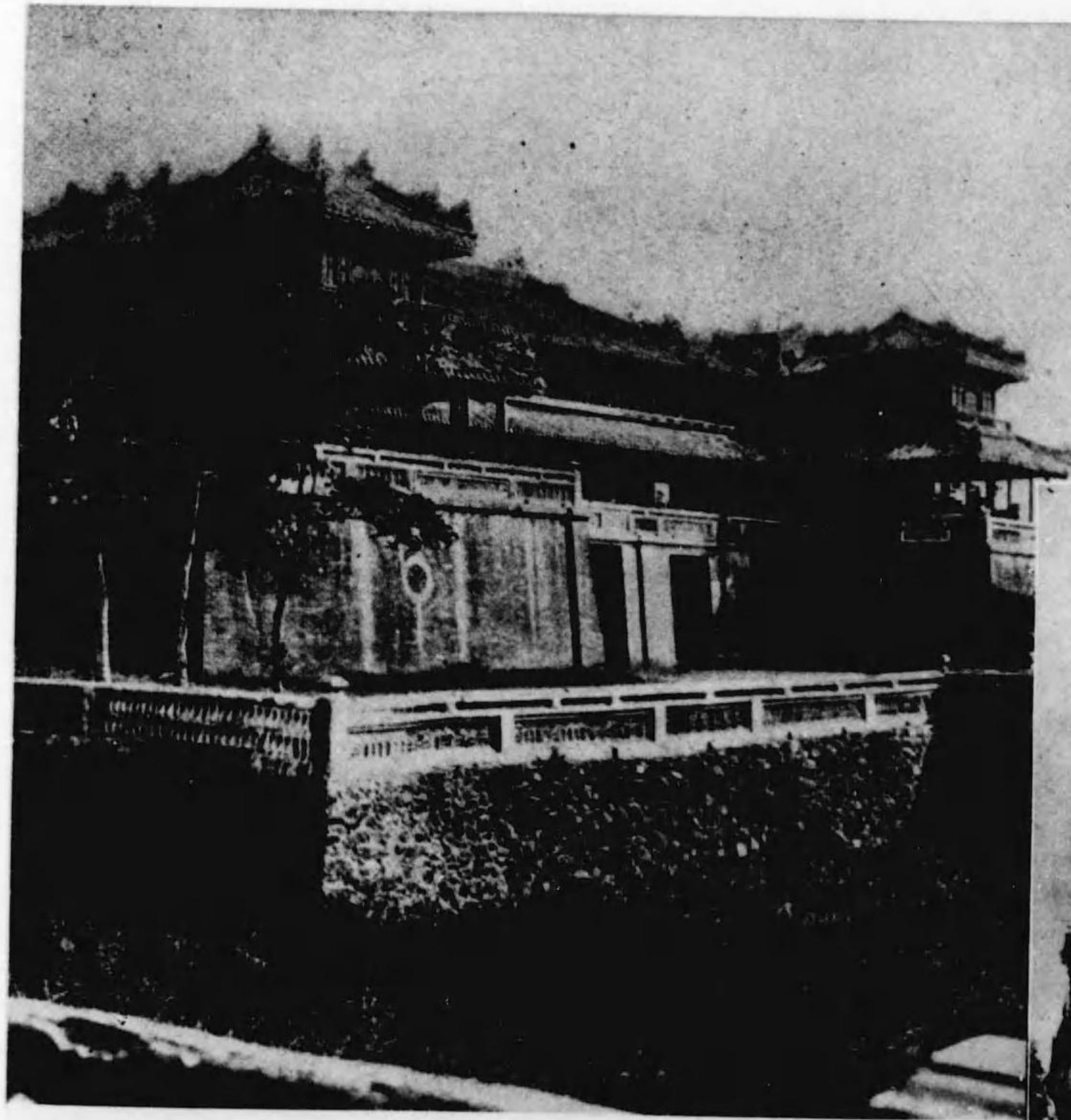


↑ 母 子 (ギア・チンにて)
 ← ツーツクの村落 (交趾支那)



モイ族の團欒飲酒

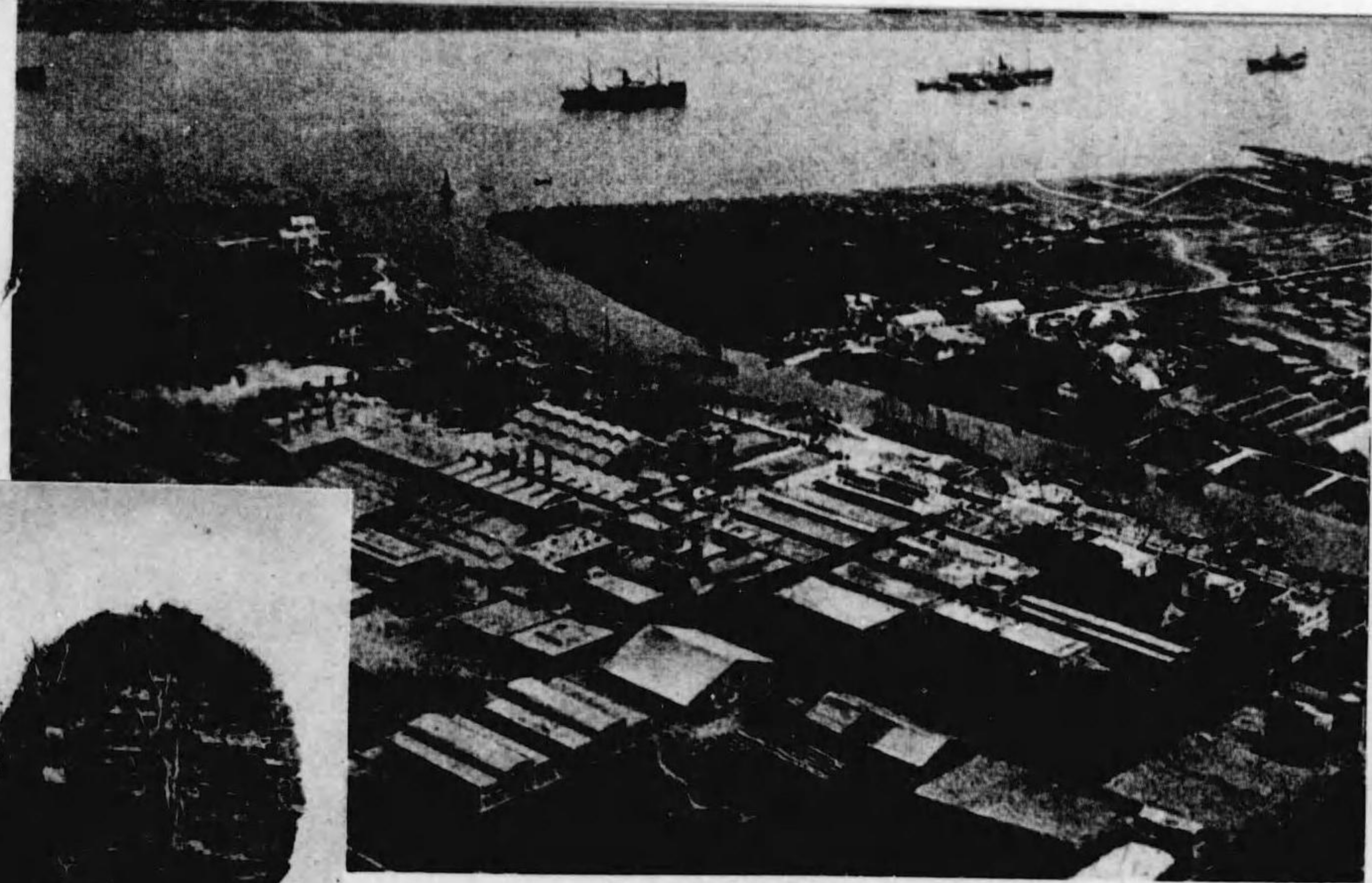




城門 (順化市)



チャムの塔 (安南地方)



工場街 (海防市)

盛大な埋葬式 (東京地方)

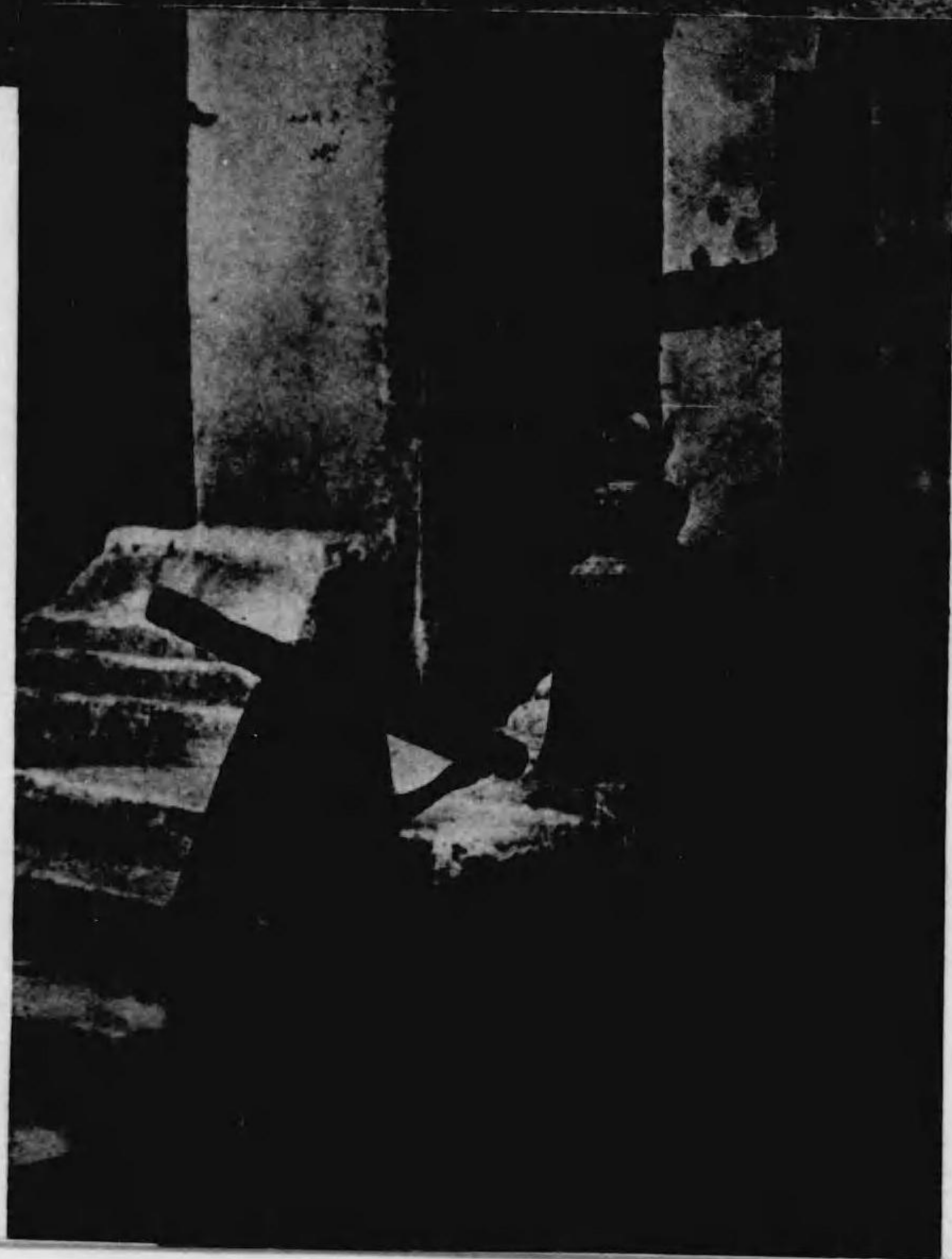


モコの塔 (河内市)



ソンコイの漁夫 (安南地方)

鐘 撞 き (ルアンプラバン)



前 編

一 佛 印 大 観

佛印即ち佛領印度支那は亞細亞大陸の東南隅に位し、北は支那、西北は緬甸、西は泰國、西南は泰
 灣(シヤム灣)、東は南支那海に接する大半島で、緯度の位置から言へば、我臺灣の南部(北緯二十三
 度)から比律賓諸島の南部(八度)迄の間に南北に長く(南北の最長距離約一千六百浬)展開して居
 る。印度支那と言ふ名稱は印度と支那との間にある處から出たものである。總面積は約七〇萬平方浬
 で朝鮮、樺太及び臺灣を含む日本總面積(約六十萬平方浬)よりも尙大である。
 印度支那は政治的に見れば聯邦にして左の五聯邦國と廣州灣佛租借地よりなるも普通單に印度支那
 又は印度支那聯邦と言ふ時は本五聯邦國の一丸のみを指し、廣州灣は含まぬものとなつて居る。

- | | | | |
|---------|-----------------------|----|---------------------|
| 老 撾 | 老 撾 (Le Laos) | 首都 | ヴィエンチヤン (Vientiane) |
| 東 埔 寨 | 東 埔 寨 (Le Combodge) | " | プノムペン (Pnom Penh) |
| 安 南 | 安 南 (L'Annam) | " | 順 化 (Hué) |
| 東 京 | 東 京 (Le Tonkin) | " | 河 内 (Hanoi) |
| 交 趾 支 那 | 交 趾 支 那 (Cochinchine) | " | 西 貢 (Saigon) |



尙右は面積の大小順に記したるものなるも一平方浬當り人口密度より見れば全く逆で交趾支那が最大で老樞が最小である。

地勢に就て一言すれば、印度支那には北部東京に紅河、南部交趾支那に湄河の二大河川貫流し各流域には夫々大三角洲がある。右平野以外は北に海防、南に西貢の二港（何れも河港）以外には大したものが無い。

海岸線は彎曲に乏しく良港としては北に海防、南に西貢の二港（何れも河港）以外には大したものがない。

人口は約二千三百萬と見積られて居る。従つて一平方浬當り僅か三十人にも足りない。尙住民は安南人であるが外に種族が甚だ多く言語・風俗等も夫々異なつて居る。

印度支那は十六世紀頃から葡萄牙人・和蘭人の侵入を受け、其後十八世紀末に入るや安南帝國と佛國との葛藤初まり、終に十九世紀末に至り交趾支那は佛國の領土と化し安南帝國其他は佛國の保護國となる等して茲に印度支那も全く佛國に征服せられる事となつた。

爾來佛國は印度支那總督府を東京の河内に設置して所謂佛印の統治に當らしめて居る。

佛印は天然資源の非常に豊富な國である。佛國領有以來既に五十有餘年になり産業も相當發達して居るが未だに未開發の土地が多分に殘されて居る。

若し夫れ尙後佛國が二千萬の被征服國民の福祉を念頭に置き、誠心誠意一切の利己主義を排して佛

印の開化開發に當るならば佛國は佛印土民の恩人と仰がるのみならず佛印は實に佛國の素晴らしい寶庫となるであらう。

然し現在の佛印と建國數年を出でない滿洲國の現状とを比較する時、例へば兩國に於ける交通機關の發達如何を案するに、佛國の植民政策と日本の對滿政策との間に著しい逕庭あることを見出さぬ譯にはいかない。

聯邦別面積及び土人種族表

(一) 面積表 (單位は平方浬)

東京	安南	交趾支那	東埔寨	老撾	合計
一一五、七〇〇	一四七、六〇〇	六四、七〇〇	一八一、〇〇〇	二三一、四〇〇	七四〇、四〇〇

(二) 種族表 (人口多き種族順に配列す、但人口二萬に達せざる種族は略す、尙種族の下は居住地域)

東京	安南	交趾支那	東埔寨	老撾
安南人(平地) タイ族(北部高地) ムオン族(同) マン族(同) メオ族(同)	安南人(平地) モイ族(チリリ地方) ムオン族(山地) チャム族(同)	安南人(平地) 東埔寨人(平地) モイ族(北部山地)	東埔寨人(平地) 安南人(同) チャム族(山地) 老撾人(平地)	老撾人(低地) カ族(山地) タイ族(低地) 安南人(同) マン族(北部山地) メオ族(同)

註II(二)表中「タイ」族は老撾人以外の「タイ」族を意味する。

佛印人口表

一九三六年人口調査に依る國別佛印人口。

軍人以外のもの	土人	東京	安南	交趾支那	東埔寨	老撾	佛領印度支那全體
	佛蘭西人	八、六三三、〇〇〇	五、六三九、〇〇〇	四、四四、〇〇〇	二、九三五、〇〇〇	一、〇〇七、〇〇〇	三、六三七、〇〇〇
軍人	支那人	一一、八三三	三、五三三	一一、八三五	二、〇三三	四九九	三〇、七一
	佛人以外の歐人及日、比、露人	三五、五〇〇	一〇、六五〇	一七、〇七〇	一〇五、七〇〇	三、二〇〇	三三五、八〇〇
その他外人(印度人、タイ人、ジャババ人等)		三九七	一五八	三六三	四三	一四	九七五
		五〇〇	一七〇	一、七〇〇	二、八〇〇	三三〇	五、四〇〇
總計		八、六九九、九六	五、六五六、一七三	四、六六、二九四	三、〇四六、六三三	一、〇二一、三七八	三三、〇三三、三三三
歐人		一三、九〇五	一、三六八	四、四四五	八六七	三二〇	一九、八九五
土人		六、八〇四	一、二九五	二、二五一	一九九	二五	一〇、五七四

註II軍人以外の佛人、歐人及日、比人並軍人全部を除く他の人口は見積りたるものなり。

二 佛印の經濟は何て立つて居るか

佛印は農業國にして其主産物は米である。米は佛印の到る處に作られ、又佛印の全土着人は日本人同様、米を常食として居る故、米は彼等の生命に次ぐ大事なものである。彼等の生活費は米を賣つて得た金によつて賄ふのであるから、若し米が不作なる年を想像せんか、佛印土民の九割を占むる農民は困窮するのみならず佛印の對外輸出貿易は激減し國內全般の不況を將來するは理の當然であり、之に反して豐作の年は佛印の經濟界が大いに明朗となるので、即ち米産立國であつて佛印の經濟は米で立つて居ると言ふべきである。而して將來も米が佛印の經濟を支配して行くことには變りはないであらう。唯茲に考へなければならぬことは佛印の主要輸出品が將來に於ても現在の如く先づ米、それから玉蜀黍、ゴム、と云つた様な譯では佛印は、昔の儘のやはり平凡なる佛印に終るであらうと云ふことである。諸種の事情に徴して右諸産物が是以上大額増加するものとは思はれない。勿論農業的諸改良に依りて幾分産額は増すことであらうが、從來の如く唯是のみにては當領の對外輸出も今後希望が持たれないであらう。此の理由に依り佛印の大資源たる森林及石炭以外の鑛物、わけても、鐵、錫等の速かなる開發を佛印の繁榮の爲に當局其他に願はなければならぬ。斯くしてこそ佛印は大いに發展すると信ずる。

三 佛印の外國貿易

佛印の對外貿易は一九二一年から二八年に至る間が最も繁榮を示し其後一九三〇年、危期の襲來と共に急激に衰へたが一九三五年頃より再び昔日の好調に漸次戻りつゝある様である。左に最近の輸出入額表を掲げる。(單位百萬法)

輸出入別		年度別		
		一九三四年	一九三五年	一九三六年
輸入	(外國より佛印へ)	九一四	九〇一	九七五
輸出	(佛印より外國へ)	一、二九八	一、二九八	一、七〇八

主たる取引先は佛國(佛印全貿易額の半分以上は佛對佛印貿易が占めて居る)で、次にぐつと額が下つて香港・支那・新嘉坡・日本・米國・蘭印の順である。

佛印の主要輸出品は米・玉蜀黍・ゴム・石炭・魚類の順で、主要輸入品は綿絲を筆頭に石油・ガソリン・機械・金屬製品・鐵・麻織物・茶及其他等で、輸入量に於て此等に匹敵するものが多數ある。即ち主要輸入品は品目小數にして輸入量多額なるも主要輸出品は品目雜多にして小額である。

四 日本と佛印

佛印は支那の西南と接觸し、廣義に云ふ所謂南洋の中では日本から比較的近く、殊に臺灣からは指呼の距離にある。

斯の如き状態にあるにも拘らず我國と佛印との關係は種々の例に徴して見て昔から餘り進展して居ない様である。東洋諸國中何れの國を見ても此の佛印ほど、在留日本人の數の僅少な所はないのである。滿洲は申すに及ばず支那にも數十萬を以て數へる日本人あり、其他南洋のジャバ・フィリッピン等何れも五千名以上である。南支の一角香港の如き小面積地だけでも在留同胞の數は優に千六百を以て算へられて居る。然るに獨り廣大なる佛印のみは現在、在留邦人はたつた三百人にも足らないのである。之を以てするも、海國日本國民の佛印進出が如何に微力なものであるかゞ解る。然らば我國と佛印との貿易關係は如何と言ふに、遺憾なる哉、是亦駄目である。則ち他國に比して貿易額が小なる上年々歳々我國は入超を續けて居り、全く片貿易である。

抑も我國と佛印との間には古くから友好的關係があつたのであるが、大正十三年メルラン佛印總督の渡日及翌年山縣公府の佛印答禮訪問があつて以後始めて公的親善關係が結ばれたのである。其後昭和二年巴里に於て日本・佛印間の居住航海協定が調印せられて彼我の關係は一層親密となり、終に昭

和七年五月、日・佛印通商協定が調印せられ、茲に到つて兩國間の通商並に親善關係は愈々濃厚となるかとも思はれたが、現状を詳に觀察してみると彼我の關係は我々が豫期して居た程の進展を見せて居ない。勿論貿易額は漸次相當に増加して居ることは事實であるが、前記の通り全く片貿易にして著しく我國に不利である。惟ふに二國間の貿易關係が圓滿に進行し何れの方にも利ありてこそ始めて兩國の通商關係が緊密となり國民間の親善關係も堅くなるのである。我々は現在の日佛印關係に尠からず遺憾の意を表するものである。

吾々は佛領印度支那と日本との通商並に親善關係の緊密を希求して已まない、故に右の如き兩國間の内面的に空虚な關係の根本原因を探求すること、而して此の根本原因たる障害物を除去することを以て焦眉の急務と考へられる。

此の根本原因としては前記の日佛印通商協定が擧げられる。本協定は則ち昭和七年五月我が在佛長岡大使と佛外相タルデュ氏との間に調印せられ日佛印關稅規定に關する日佛通商協定を云ふのであるが、此の關稅協定は、當初に於て本協定より兩國經濟親善の第一歩が踏出され、又彼我の貿易額も急激に増加した次第であるが、年を経るに従つて佛印よりの我國輸出が盛んとなるに反し、日本よりの輸出は餘り進展せず、現在の状態に於ては本協定は最早日本に著しく不利なることが明白になつて居る。若し此状態を何時迄も傍觀するとすれば、日本の立場は愈々苦しくなるであらう。實を言へば

本協定は、締結當時に於ては兩國の經濟親善を目的とし、差當り利害の一致した範圍内で締結せられたもので、固より其内容は詳に検討すれば遺憾な點が多々あつた次第である。要するに日本としては本協定が兩國間の眞の經濟親善に悖るものなることを充分説明して本協定の改訂に乗出すべき秋であると思ふ。日本品の大部分が佛印に入るに際し現在の如き關稅障壁に出會ふことは輸出日本の發展上より見ても、佛印在留日本商の窮況より見ても、斷じて默過すべきではない。

日本が「日本品に對する佛印現關稅率の改正」を實行せざる限り、彼我貿易關係の眞の緊密は望めない。今春、幸にして日佛印間の經濟關係を改善する目的を以て東京會談が開かれたが、本書印刷中には妥結に到らない。我等は期して同會議の良き結實を待つものである。

附 日佛印貿易表（單位千法）

一、貿易額表

	一九三四年	一九三五年	一九三六年
日本から佛印へ	二二、三八三	二六、三一五	三四、六四四
佛印から日本へ	四〇、九八五	五四、〇六九	七八、二九六
貿易總額	六三、三六八	八〇、三八四	一一二、九四〇

二、取引商品表

日本から佛印へ	綿（貨を取りたる）、天然絹織物、茶、陶器、雜貨、木製品、アスファルト、鐵線等
佛印から日本へ	石炭、ゴム、漆等

五 佛印在留日本人

佛印に在留する日本人の總數は昭和十一年十月一日現在の調査に依れば二五二名となつて居る。廣大なる佛印領を思へば是は又實に微弱な同胞の進出振りであつて、もう少し日本人が佛印に發展することが出来ないであらうか。

偕て佛印在留日本人は大部分、河内・海防・西貢三都市に集り大體類似の商業（殆んど全部個人經營）に従事して居る。其中最も多いのは日本商品、主として雜貨を輸入して雜貨商を營むもので、其他は東京生漆の日本輸出、石炭の日本輸出、其他佛印農産物の日本輸出を業として居る。而して河内在留邦商の中には雜貨商と漆輸出を兼ねて居るもの多く、又石炭の輸出は主として三井物産出張所が行つて居る。尙港市では通關業を兼ねて居る輸出入商もある。

佛印在留日本人の大多數が何故雜貨輸入販賣商を經營するのかと言ふ疑問は誰しも起すところであ

るが、他の商品では關稅障壁の爲め商賣が成立しないからである。而も雜貨として景氣が良いわけではなく、一般に商況が思ほしくない様である。

佛印在留日本人分布表 (昭和十一年十月一日現在調査)

計	女		男		東京	河内海防其他
	一	二	一	二		
五六四六二二	二四二七一六	三二一九六	五七	二〇	四五	佛印全體
六七	一五	四六	一	〇	〇	一三三
一二四	三五	九八	二	〇	〇	二五二

佛印在留主要日本商店名表 (昭和十一年十月現在)

地名	商店名	所在地	營業內容	組織
山根	山根事務所	78, Boulevard Carnot	鐵業	會社

河	市内 (Hanoi)	海防 (Haiphong)	市 (Vinh)
大南公司支店 (平井繁四郎)	下村洋行 (下村里壽)	保田洋行 (竹内松治郎)	三井物産出張所 (馬渡嘉八)
83, Rue des Paniers	54, Rue du Takou	4, Boulevard Paul Bert	Vinh (Annam)
輸出入業、雜貨商	輸出入業、雜貨商、漆輸出	輸出入、船舶代理、通關業	鐵業
個人	個人	個人	個人
菊地洋行 (菊地市之助)	齋藤漆店 (松田敏)	池田洋行 (奥和夫)	長島洋行 (長島よね)
131, Rue Duvillier	60, Rue Jules Ferry	56, Rue du Commerce	40-42, Boulevard Paul Bert
漆輸出、輸出入業、雜貨商	同右	同右	雜貨輸入販賣業
個人	個人	個人	個人
田島洋行 (岡田耕一)	渡部洋行 (渡部統一)	水谷商店 (水谷乙吉)	岸本商店 (阿部信次)
Rue du Coton	同右	石炭輸出、雜貨輸入販賣	同右
漆輸出業	同右	石炭及硅砂積出立會	同右

日本人關係公的機關。

市	貢 (Saigon)	西	所	在	地
村上洋行 (村上)	林商店	森瀨商店 (鹽田啓人)	鹽田商會	大南公司本店 (東地正一) (松下光廣)	三井物產出張所
				9, Rue George Guynemer er	41, Rue Lefebvre
				142, Rue d'Espagne	輸出入業、雜貨商
				70, Boulevard Bonnard	同右
				111, Quai de Belgique	雜貨輸入販賣
				77, Rue Gialong	同右
					同右
					個人
海防日本人會	河内日本人會	西貢日本人商業會議所	海防日本人會	河内 Hotel Oda (41, Rue Vieille des Tasses) 内	9, Rue George Guynemer, Saigon
				海防 Yasuda Yokok (4, Boulevard Paul Bert) 内	

後編

一 氣 候

佛印と言へば「炎暑の地」だとか「常夏の國」だとか直ぐ口にする日本人があるが之等は佛印を充分に知らぬ者の言である。勿論、佛印が熱帯圏に屬して居ることは事實であるが、然し佛印全體が堪へられぬ程の酷暑であり、或は年中夏であると謂ふわけではない。所によつては暑さも左程酷くはなく、又冬季もあるが、然し乍ら雪は老樾の高山以外は降ることはない。

佛印の氣候は大體中央部を境として北と南とに二分して觀察することが出来る。先づ南部(交趾支那全部、東埔寨、安南の南部)に於ては全然熱帯氣候にして溫度は一年を通じて餘り大差無く(年平均溫度廿六、七度位)四月から六月頃迄が最も高溫度である。然し西貢方面では夜間に氣温が低下して涼しくなり亦暑いと言つても河内の夏に於ける様に耐え難い程の暑さではない。

次に北部(東京全部、安南北部、老樾等)に於ては南部とは著しく異なり夏冬に分けることが出来る。即ち五月頃から十一月頃迄は夏で他の月は冬に近い季候である。然し冬と言つても日本の如き冬でなくして、即ち雪も氷も見ることなく單にオーヴァを着る程度に寒くなると言ふに過ぎない。實際

東京に於て一月二月頃は相當寒くストーヴを使用する程である。夫れでも氣温は最低七度で、それ以下には餘り下らないのであるから相當不順な氣候と謂つてよい。反對に夏季は、之亦冬季と對照すれば馬鹿に暑く、特に東京に於ける六、七、八の三ヶ月は實に佛印領内の最高温度（平均卅四）を示し昭和十一年の六月初旬、河内市に於て室内の温度が攝氏四〇度を突破した事もある。佛印總督は河内にて執務するのが普通となつて居るが如何に總督と雖も夏の河内の炎暑地獄には勝てず毎年前三ヶ月間は逆に常夏の國西貢へ避暑しに行く程である。

雨は南部西貢方面では毎年五月から十月頃迄降り、右以外には餘り降雨無く、北部河内方面では七月から九月迄回数少きも降雨量多く、尙東京方面では冬季中雨量少きも毎日の様に細絲の如き雨が降り續き空は常に曇つて居て頗る陰鬱で、此の氣候を稱して「クラシヤン」の氣候と呼ばれて居る。

以上は佛印の氣候の概略であるが最後に河内方面の夏は非常に蒸暑く夜間と雖も温度が急に低下しないといふことを附言して置く。

二 旅行季節

狩獵其他特種の目的を有せず唯單なる觀光の爲の佛印旅行であるならば暑熱が激甚でなく且降雨の少ない季節を選ぶべきである。斯かる季節は北部河内地方に於ては十、十一、十二の三ヶ月であり、

南部西貢地方に於ては十一月頃から翌年四月頃迄であらう。此の季節は毎日空がカラリと晴れ渡り耐へ難き程の炎暑もなく實に絶好の旅行日和が続くのである。

一方日本の暑中休暇を利用しての佛印旅行も決して悪くはない。勿論西貢は夫程でもないが、河内地方は六・七・八月は非常に暑い。然れども夏季には數日置に一、二時間ザーツと豪雨が来て、其後の爽快味は言語に絶する程で、佛印の眞の姿に接する意味に於ても亦夏季旅行は悪くはないのである。

尙河内の冬季は氣候の部で述べた如く毎日鬱陶しい天氣で氣温も相當低下して底冷が甚しいから旅行には絶好の季節とは言ひ難い。要するに佛印を訪れるには如何なる季節でも勿論差支無いのであるが健康上より見るならば、日本の秋を後にして此の地に渡來旅行することが最も好適とされてゐる。

三 渡航手續

佛印渡航に際しては一般外國へ行くと同様旅券を必要とする。従つて佛印へ旅行の爲め渡來せんとする邦人旅行者は先づ外國旅券の下付を申請せなければならぬ。尙佛印旅行者は渡航に當つて旅券の他に非移民申告書なる書類を携帯する必要がある。之に就いて注意すべきことは、旅券は日本駐在佛國外交官又は領事の査證を受くる必要があるのは勿論であるが、上記非移民申告書も、亦證認を受く

る必要がある。(料金は時々變更されるが、一般査證が六圓、通過査證が一圓程度である。)

以上の他、英語若しくは佛語で書かれた種痘及びコレラ豫防注射の證明書が必要である。

在日佛國公館所在地

横濱(領事館) 横濱市中區山手町一八五 (電話本局三四八〇)
神戸(領事館) 神戸市神戸區北野町二ノ五二 (電話葺合四五〇〇)
長崎(代理領事事務所) 長崎市常盤大浦七
京城(領事館) 京城府蛤町三〇光化門七九七
淡水(領事館) 臺北州淡水郡淡水街字砲臺 (電話一五)

四 本邦からの連絡航路

日本から佛印へ渡航するには大體次の二つの航路がある。

- (一) 日本から海防着
- (二) 日本から西貢着

(一)は則ち佛印の北門から入國する場合であり(二)は南門からする場合であつて、(一)の場合の方が通常よく邦人旅行者に採られて居る徑路である。今右二つの場合を夫々説明すれば、

(一) 日本から海防着の場合

此の海防着にも左記の如く二つの順路がある。

イ 直航路

現在大阪商船會社は西貢盤谷線を經營して居る。此航路に就く船はサイゴン丸、バンコック丸の二隻(何れも新造の貨客船にして五千噸級)で毎月一回二十五日頃兩船交代に神戸港を出帆し、基隆—海防—西貢と寄港して盤谷を終點として居る。故に海防迄は途中乗換へ無しに直航することが出来る。神戸—海防間の所要日数は十二日内外で、日本から佛印へ行く邦人渡航者の大部分が此の船便を利用するのは、上述の如く此の船が直航路の日本船で、船賃が他の徑路に依るよりも低廉なる爲であらう。

ロ 香港經由航路

日本より郵船其他に依つて香港に到り、茲で船を換へ、香港—海防間の定期船を利用する徑路である。目下香港—海防間には佛英兩國會社の二種の定期船があり、前者に屬するものには Canton 及 G.G. Paul Doumer の二隻、後者には King-Yuan 其他がある。之等の内カントン號のみが香港海防間の直航船(所要時間、片道二日)であるが、其他の船は香港から海防に到る間、海口・北海(支那沿岸港)に寄港し、香港海防間所要日数は四日である。又右船便の回数はカントン號は月三回、ポール・

ヅーメル號其他は月二回位兩港を出帆する故、香港に於ける郵船との連絡は最悪の場合でも一週間を越へる事はない。都合良く運ぶ折は一日も待船をせずに済むこともある。

(二) 日本から西貢着の場合

此場合には直航船を利用するが適當であらう。直航船には左の二つがある。

イ 前述大阪商船の西貢盤谷線にて臺灣・海防經由西貢着

ロ 佛國MM郵船により西貢着

此の佛國郵船はマルセイユ―神戸間に定期航路を開いて居り、西貢を佛印領内唯一の寄港地として居るから、神戸を此船で出發すれば乗換無しに西貢へ着く。日數も(イ)の大阪商船と同程度であるが、唯惜むらくは船賃の高きことである。

以上で日本から佛印行船便を簡単に記述したが、海防西貢行何れにしても大阪商船の直航船を選ぶことは、特別な場合を除き普通一般的且經濟的渡航方法であらう。

五 一般的注意事項

一 携帯品

携帯品は旅行の範圍及び目的等に依り異なるのが通常であるが、手荷物を少くして身輕に旅行出来る

事が大切であるから、左記に大體の注意を述べて置く。

大形のトランクは取扱ひが不便であるから、成るべくスーツケースとハンドバッグを御薦めする。

汽船利用の場合には大人一人に付き、一等三百五十封度、三等百五十封度以内の手荷物は無賃で輸送してくれる。上記制限量を超過する場合は十封度に付き五〇錢の料金を必要とする。以上は香港以東の諸港に共通である。

飛行機に依る場合には十疋迄が無賃で、それ以上一疋毎に距離に比例して所定の超過料金を課せられる。而して、一人三十疋以上は許されないのが原則であるが、搭載貨物その他の事情に依り、更に制限を加へられる事もある故、注意を要する。

危険品、特殊菓物、野菜、植物等には品目に依り携帯又は移入禁止品が多いから之も注意を要する。

手荷物には必ず汽船會社でくれるレーベルを貼付し、尙手荷物保険をつけて置くことと便利である。

二 旅行服装

氣候の部に於て述べたる如く佛印領内、中央部を境とする北部地方は夏冬の歴然たる區別があり、之に反し南部地方は所謂純熱帶的氣候で四季の別無く年中夏の如き觀を呈してゐる。従つて佛印にて着用する服装は南部と北部とにより異なる場合が多い。旅行者は服装に就き左記のことを考慮に入れ

て置くべきである。

佛印北部地方（東京、老樞全土及北部安南）に於ては在住外國人は一般に、四月中旬から十一月に至る迄は夏服（白服等）、十二月から翌年四月上旬迄は合服乃至冬服を着用する。

南部地方（柬埔寨、交趾支那全部及安南の南部地方）に於ては年中夏服を着用する。

右は服装に就ての一般的注意事項であるが、尙次に氣附いた諸事項を御参考迄に列挙して置く。

(イ) 佛印の夏は太陽の光線熾烈なるを以て男子は全部白きカセット帽を被る。(本帽は一名植民地帽と謂はれて居るもので、日本では殆んど使用せぬが佛印では皆之を用ひ、麥藁帽やパナマ帽は餘り男子に使用されない。尙ほ「カセット」は佛印に渡航した後買ふ方がよい。

(ロ) ワイシャツ、夏シャツ及靴下等は成る可く日本にて大量準備するがよい。佛印では之等諸品は割合高價である。

(ハ) 白靴類は前記カセット帽と同じく佛印の方が良質安價である。

(ニ) 夏の佛印旅行ならば、白の夏服は三着位、冬季ならば合服及冬服夫々一二着にて充分である。尙レインコート及冬季ならば外套も持参する方がよい。但し西貢方面のみを旅行ならば夏服で充分である。

(ホ) 寝間着はパジャマ二着位。日本の浴衣でも結構であるが、場所に依り、洗濯代を高く取られ

る事がある。

(ヘ) バスローブ（浴衣）は一着必要。船内或ひはホテルで共同浴室へ行く時に用ひる。室内でも朝夕パジャマの上に用ひて寛く事が出来る。

その他携帯藥品・眼鏡（若し用ふる方ならば）等は豫備を持つて行かれると良い。

味附海苔・羊羹・煎餅等は嵩らぬ程度に持つて行くと船車中での慰安になる。

三 上陸と通關

船が愈々佛印の港に着けば、上陸に際し税關の検査を受けなければならないのは申すまでもない。之は何處でも同じことであるが、佛印の税關吏には、特に保守的で八釜敷い感情的な佛人が存外多い故、上陸に際しては特に大國民としての態度を持って、言行を慎むと共に申告すべきものは正直に申告することが肝要で、詐訟を爲したり理窟を捏ねたりせぬ様異々も注意すべきである。従來通關上非紳士的行爲をして大いに叱責されたり、三桁にも上る罰金を課せられたりして、日本人の面目を汚損した邦人も皆無ではないのである。

手廻り品等は大概無税であるが、酒・煙草・絹製品等には相當嚴重な制限がある故、豫め知つて置かねばならない。

斯くして恙なく佛印に入國出来れば旅行者は上陸日から三個月間は自由に國內を旅行し得るのであ

つて、右期間が過ぎても佛印の地方理事長官の許可を得て、尙三個月間滞在期間を延期してもらへることゝなつて居る。要するに佛印に入國する非移民（觀光客の如き）は六ヶ月を限り非移民として滞留することを許されるのであつて、夫以上滞在せんとすれば、移民と見做され移民の規則に従つて諸種の税金を課せられることゝなるのである。

尙ほ日本人旅行者は佛印入國を許可された後は可及的速かに上陸地に近き帝國在外公館に出頭し挨拶して置くに越したことはない。佛印には現在、北部河内に總領事館、南部西貢に領事館、と二つの帝國在外公館がある。

六 通用言語と新聞

三 言語

凡そ外國にあつて話しが出来ぬこと程残念な情無いことはない。之は此種の辛い經驗を嘗めた洋行者の常に洩す言葉である。

佛印に於て一般に通用する言語は安南語及び佛語である。前者は佛印の代表的土人たる安南人の言語であり、一般安南人が日常之を使用して居ることは言ふ迄も無い。佛印は非常に人種が雜多で、従つて其話す言語も夫々異なつて居るが、住民の約八割近くは現在安南語を用ひて居る。安南語は現在、

ラテン文字で書かれる様になつたが昔は漢字に類似せる安南文字が用ひられて居たのである。安南語は見た所英語や佛語の様であり、聞いた感じは支那語を想はしめる。日本人は、凡そ安南語とは縁遠い状態に置かれて居る爲、佛印に在住したことのない日本人の中、此の言語を理解し得る者は恐らく十指を越さぬであらう。佛印の眞の姿、安南人の生活状態・風俗・習慣・歴史等を研究する目的を以て佛印に渡航する者は是非共此の土人語を知つて置く必要があるが、夫れは到底一朝一夕の業ではない。

次に佛蘭西語が佛印に通用する事は同植民地が佛國の支配を受けて居る關係上別に疑問は無い。佛印の在住佛人は至つて少数ではあるが、當局は佛印征服以來出来るだけ佛語を土人間に普及する事に努め、安南人學校に於ても佛蘭西語の教授を奨励施行して居る。其結果現在では高等小學校卒業程度の安南人でも充分佛語を解し、高等教育を受けたるインテリ土人などは恰かも佛人の如く流暢に佛語を操つる迄に至り、河内・海防・西貢等を始め各都市のホテルの土人ボーイは勿論安南人商店員でも大抵佛語が通ずる現状である。従つて前述の如き特殊の目的を有せぬ旅行者は佛語さへ多少知つておけば佛印旅行は言語上左程不便を見ぬであらう。

尙茲に一言して置きたいのは佛印は英語が全然通用しない國である事である。先年初夏當地を周遊せる彼のチャップリン氏が言葉で甚だ失望したことも耳新しい事實であり、尙亦二、三年前當領を見

學せる日本人の教授學生等若干が、英語はお手のものでもあつたが當地方を唾同様で過したことも笑へぬナンセンスであつた。

新聞

佛印の新聞の歴史は他國に比れば新しいが、夫れでも五十有餘年の昔に遡つて居る。然し乍ら現在に到るも未だ新聞事業が餘り發展して居ず、新聞數が少く從て發行部數も渺いのは、其國情の然らしむる所であらう。即ち新聞事業の發達は讀者數の如何に依ることは無論であるが、佛印で日常新聞を読むものは僅々十萬を出ないと思ふ。而も此の十萬の内三萬迄は外國人が占め、残る七萬が土人である。佛印土人の全人口二千二百五十萬の内新聞購讀者が僅か七萬しかない程土人は無學であり又新聞を買へない程貧困なのである。

佛印に於ける新聞購讀者は大別して安南人を主とする土人讀者と佛人・支那人・印度人・日本人等の外國人讀者とに區別せられる。前者は土人の内の一部インテリ階級に過ぎず其數は前記の如く問題にならない。後者は佛人が最大多數で他は極めて少ない。就中支那人は佛印領内に四十萬人位在住して居ても勞働者が多く、從つて新聞購讀者は僅少である。

次に新聞は之を大別すれば安南語新聞と佛語新聞とに分たれ、前記購讀者の中、佛人は佛紙購讀

者、土人は大部分安南紙、一部分佛紙購讀者、日本人は全部佛紙の購讀者である。支那人は安南紙・佛紙を購讀者もあるが、西貢方面では主としてシヨロンで發行される支那語紙を讀んで居る。次に印刷等の技術は日本より著しく劣り、田舎新聞の感が深い。而も其の割に値段は高く一部十仙もする。尙新聞の現状は都市集中である。

佛印の新聞を購讀せんとする日本人に御勧めしたい新聞としては

河内市發行のものでは

L'Avenir du Tonkin

La Volonté Indochinoise

海防市發行のものでは

Le Courrier d'Haiphong

西貢市發行のものでは

L'Impartial

La Dépêche

L'Opinion

等である。以上は何れも佛語紙（内容は情報紙）にして當地では一流のものである。其他の佛語紙は

皆三流どころである。序に、安南語新聞には讀むべきものがない。

佛印の雑誌は讀者僅少の爲經營難であり、従つて其數は至つて尠く且内容が頗る貧弱であるので一般的には餘り讀まれて居ない。

七 通貨と通信

通貨

佛印の幣制は銀本位制で本位貨の單位をピアストル (Piastre) とし、一ピアストルの價値は法定上佛貨一〇フランに相當せしめて居る。従つてフランの下落はピアストルの下落となる。而して一ピアストルを百仙に分ち、仙を補助貨幣の單位として居る。

佛印に現在通用しつゝある硬貨には五〇仙銀貨、二〇仙銀貨、一〇仙銀貨、五仙白銅貨、一仙青銅貨、〇・五仙銅貨及サベツク貨（六分の一仙貨にして銅貨・亞鉛貨・眞鍮貨の別あり）の七種あるもサベツクは主として土人間に使用される。

紙幣は印度支那銀行が發行するもので、之には一^{ピアストル}比弗・五比弗・二〇比弗・百比弗の四種がある。

尙日本貨對佛印貨の換算率であるが、昭和十一年十月一日迄は約二三〇圓が一〇〇比弗に相當し佛印旅行の邦人は不利な立場に置かれて居たが同二日よりフラン貨平價切下の結果佛印貨も之に追隨し

て切下げ、當時は約一六〇圓が一〇〇比弗となつて居た。處が其後フランは落着かず、絶えず下落する一方で、近年では約一三〇圓が一〇〇比弗に相當して居る。是で日本人の佛印旅行は、經費の點より見れば負擔が大分軽くなつた譯である。

尙最後に銀行であるが、日本人旅行者が利用するに便利なものとしては次のものがある。此等は何れも本店を國外に有し佛印にあるものは何れも支店代理店である。

香港上海銀行 (The Hongkong Shanghai Banking Corporation 本店香港)

佛印に於ける支店又は代理店所在地

Haiphong, Saigon, Hanoi

印度支那銀行 (Banque de l'Indochine 本店巴里)

支店又は代理店所在地

Saigon, Haiphong, Hanoi, Pnom-Penh, Hué, Vinh, Nam-Dinh, Tourane, Thanh-Hoa,

Quinhon, Cantho, Battambang

佛支商工銀行 (Banque Franco-Chinoise 本店巴里)

代理店所在地

Saigon, Haiphong, Hanoi, Vinh, Tourane, Pnom-Penh

通 信

佛印に於ける郵便輸送は交通機關の未發達の爲め郵便物は敏速に配達せられないが、通常、鐵道及自動車をしてし、老樾の如き不便な處では河舟に依つても爲されて居る。今後、鐵道の敷設が進むに従つて改良せられるであらう。外國との連絡は勿論船舶によるが、飛行便もある。尤も、佛印は今日なほ未開な植民地であるので船舶の寄港も頻繁でないために、佛印から海外へ輸送される郵便は便船の都合に依つては幾日間も待船を餘儀なくされることがある。

佛印からの外國向け郵便の配達に要する日數は大體次の通りと思へば間違ひはない（日數は佛印にて投函した日より計算）。

普通郵便

日本……早くて十日遅くも二十日位

香港……早くて三日遅くも十日位

歐洲……四十日前後

航空郵便

歐洲……八日乃至十五日

暹羅……二日乃至八日

以上の通りで、船便及航空便の出發前日に投函すれば右の中早い日數で配達される譯である。尙郵便料金は左の通。

内國郵便

(イ) 普通郵便（封書及び封緘葉書）

二〇瓦迄………五仙

二一—五〇瓦………一〇仙

五一—一〇〇瓦………一五仙

以上百瓦若しくは其端數を増す毎に四仙を加ふ

(ロ) 普通印刷物（除定期刊行物）

五〇瓦迄………二仙

五一—一〇〇瓦………三仙

以上百瓦若しくは其端數を増す毎に三仙を加ふ

外國向郵便

(イ) 普通郵便

二〇瓦迄……………一五仙

以上二〇瓦若しくは其端數を増す毎に九仙を加ふ

(ロ) 普通印刷物

五〇瓦迄……………三仙

以上五〇瓦若しくは其端數毎に三仙を加ふ

(ハ) 繪葉書、葉書

九仙

尙書留料は内外とも十五仙である。而して内外とも二疋以上の郵便は其種類の如何を問はず認められてゐない。

最後に電報及び電話であるが、前者は内外電報を問はず何等不便なく領内到着處で利用し得、又配達も都市に於ては申分がない。後者は近年急激に増加し、東京・安南・交趾支那の各領内間の通話は比較的自由に出来る様になつたが、河内・西貢間は今尙未通である。東京・老撾間及び柬埔寨・老撾間には全く電話線が無いが、東京・安南間は完成して居る。以上簡単に佛印の通信状態を説明したが、要するに旅行上の通信には大體不便ない程度である。

八 衛生状態

佛印と言へば今でも「萬病の國」と考へて居る日本人が相當居るかも知れないが、現在の佛印は最早「萬病の國」の域から遙かに離脱して居る。

昔の佛印は事實萬病の國であつた。即ち佛蘭西人が現在の佛印の地を征服して、佛人が段々移住し初めた當時は毎年流行病が猖獗を極め、土人は勿論、之に罹つて斃れた佛人も相當數に達し、加ふるに氣候不順の點もあり、外國人の永住は不可能と迄考へられて居た。然し乍ら當局は之に屈せず、着々保健醫務機關を設置し、都市及地方の衛生状態改善の爲に盡力した結果、佛印一般の衛生状態は次第に良くなり、傳染病の發生も減少し、現在に於ては少くとも河内・西貢等の都市に關する限りは流行病の心配無しに生活出来る迄に至つた。

今、死亡率を例に取つて衛生状態の向上を説明すれば、一九〇〇年即ち四〇年前の佛印に於ける歐人(主として佛人)の死亡率は同人口の三・四五%であつたが一九三〇年の三〇年後には一・二八%と著しき減少振りを見せ、他方土人に就て見るに、是亦一九〇〇年に四%なりしものが一九二九年には二・二〇%と低下したのである。

以上の通り佛印領内の衛生状態は著しく改善せられ、今後も當局の盡力に依り益々良き方向に向ふで

あらうが、唯一つ遺憾なのは當局の折角の努力にも拘らず當領土着民の大部分殊に都市よりも地方のものは未だ衛生觀念が至つて乏しく、従つて一度流行病が発生すると多數の犠牲者を出す事が通例となつてゐる（土人の多くは實に不衛生で食物に蠅がたかつても何とも思つてゐない）。次に昔から佛印に於て發生を見る主なる傳染病及び風土病を列擧する。

一、傳染病

(イ) コレラ

コレラは佛印にて最も死亡率の高い病氣で一九一一年、一九一二年、一九一五年、一九二六年に猖獗した。發生地は主に交趾支那西部、東京及北安南であつた。尙數年前、十數年振りに東京地方にコレラが流行し當局は防疫に全力を盡して居たのであるが無智な土人のこととて豫防注射も徹底せず數千人（土人のみ）の死亡者を出した。幸ひ河内市は衛生機關も整備して居る爲殆んど犠牲者を出さなかつた。要するに豫防注射の不徹底と不衛生々活とがこの病氣蔓延の原因であるから之に注意すれば良いのである。

(ロ) 天然痘

本病は殆んど佛印領各地に發生するが特に僻地に多い。當局は發生毎に種痘を強制してゐるが、無智な土人の中には之を回避するものが多く本病に罹るものは大抵之等土人である。最近都市では殆んど發生を見ない。

(ハ) ベスト

支那人街に發生する様である。現在は相當減つてゐるが尙、年に三〇名位の罹病者を出してゐる。

(ニ) 腸チブス

(ホ) チフテリア

(ヘ) 花柳病

佛印に於て花柳界に身を落して居る女の大部分は土人、一部分は佛安混血人であるが、斯かる職業の女の九九%は淋病を有し、五〇%は梅毒を有する現狀である。又其他ダンサー等も大部分は淋病患者である。従つて佛印渡航者は呉々も注意される事が肝要である。

(ト) 狂犬病

佛印には野犬が非常に多く、毎年夏季には狂犬病が相當發生流行するので特に注意して置く。特に河内地方では犬に充分の用心をして、決して咬まれないように注意しなければならぬ。

二、風土病

(イ) パルデイスム（マラリア熱）

マラリア熱は交趾支那西部の赤土地方、安南（高度千米）、東京三角洲高地（八百—千米）に良く發

生ずる。同病は蚊が媒介するのであるが、河内・海防・西貢等の都市に於ける蚊は別に刺されても心配はない。佛印では年中蚊が発生してゐるので四六時中蚊帳生活をやつて居る譯であるが、都市及低地に於ける蚊はマラリア病原菌などは持つて居ない様である。唯前記の如き高地に於ては現在でも相當に危険である。以上の次第で普通都市及低地を旅行する観光客は心配することはないが併し出来るだけ蚊に刺されぬよう注意すべきである。

(四) 脚 氣

脚氣は何處の國でも普通の病氣であるが、佛印でも昔から土人に多く發生するが、最近は相當減少して居る模様である。

以上病氣に就て一通り説明したが、何れの病氣なるかを問はず、それに罹つたと思つたならば早速醫師の診察を受けるべきである(佛印領内、特に都市には病院の設備があり此の點安心である。尙醫師には佛人と土人とがあるが成るべくなら佛人を選ぶべきである)。

佛印の衛生状態は衛生設備の完備に依つて昔より著しく改善され、日本からの旅行者は病氣と言ふ點では次の諸注意事項さへ心得て居れば左程心配も無いであらう。

今一步土人の衛生に對する觀念が向上されてこそ佛印の衛生状態も完全になつたと言へる(實際

當地在留の歐人、日本人等の衛生智識は申分なく、従つて最近流行病の犠牲となつたものは殆んど無い。要は土人の方の問題である)。

佛印に於ける衛生上の注意事項としては、

- 一、水道の水は必ず沸騰させてから飲むこと
- 一、野菜は必ず煮て食ふこと
- 一、過食せぬこと
- 一、必ず新鮮な食物を食ふこと。

九 主要都市及び觀光地

觀光の點から見れば佛印はアンコールを初め各地に史蹟が豊富に有り之のみを以ても觀光の爲に渡航する價值が充分にある國である。加へて現下の世界情勢より考へれば諸外國中その位置も頗る近い日本からは觀光に親善に、今一層積極的な渡航を希望して止まない。今佛印に於ける觀光主要地を二大別して都市及名所とし各地方別に夫々簡単に説明する。

一、都 市

イ、東京地方

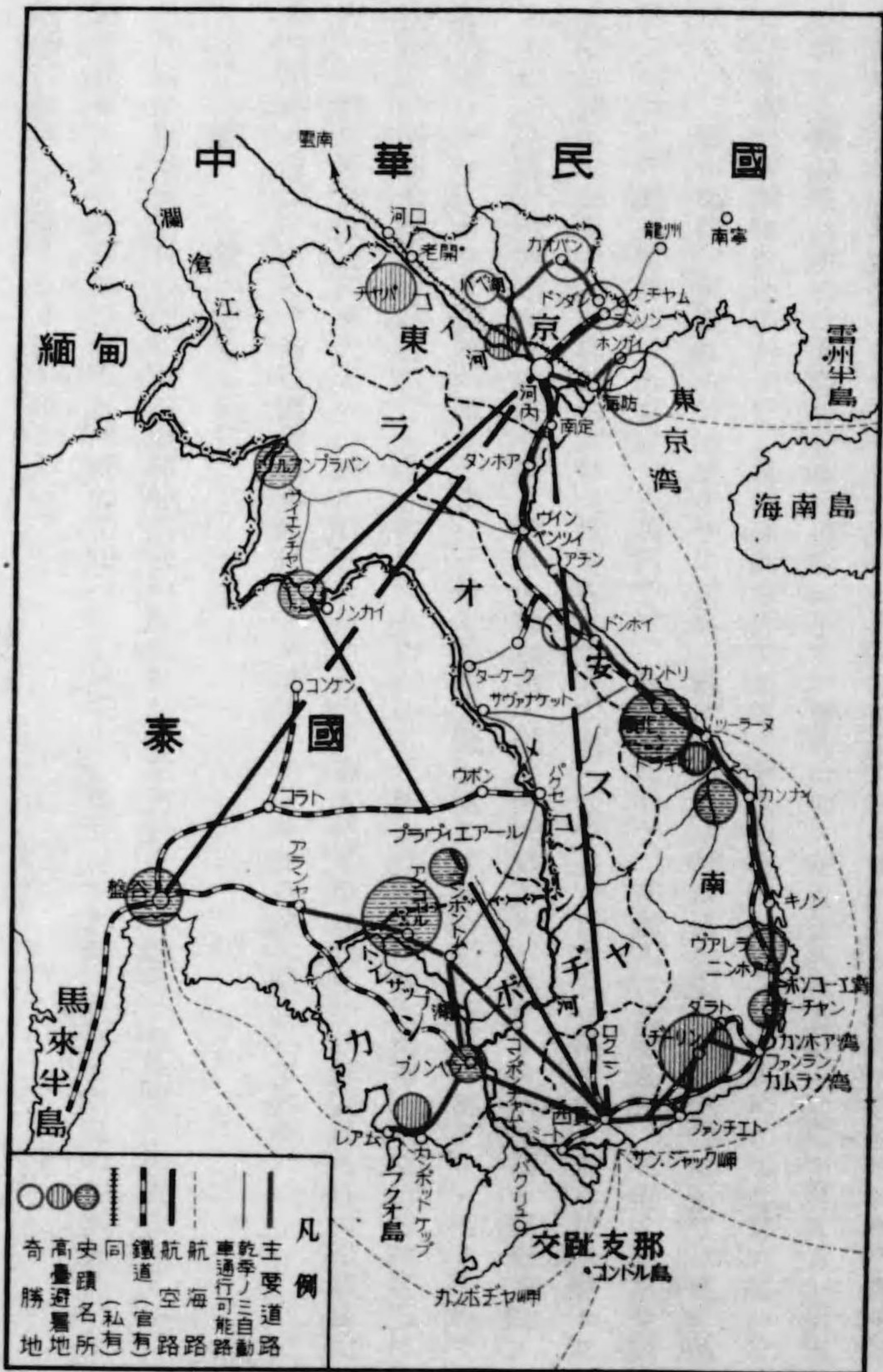
東京は佛印北部の地方で佛印全面積の約六分の一を占める。主要都邑は皆紅河の作る大三角洲上にあつて東京人口の八一パーセントは此のデルタに生活して居る。最近益々人口が増加する一方で當局は東京デルタ人口過剩対策を目下眞剣に考究中である。本地方の主なる都邑は河内・海防・南定等である。

(1) 海防市 (Haiphong)

佛印の北部入口で人口約七萬五千、海岸から紅河の支流クアカム河を遡ること三〇哩の地點にある良港である。市街は佛人街と土人街とに分れ、佛人街は近代式で道路が廣い。海防は東京第一の商業地で重要な銀行・會社・商店・工場等多數存在し、特にセメント工場・税關・保税倉庫等は廣大なる面積を占めて居る。東京無煙炭を背後に控へて海防の工業的將來には輝しいものがある。同市の人口の中約二千五百が白人で其内約九割は佛人である。海防の佛人は殆んど全部貿易其他の商人である。日本人は現在約四〇人ゐる。海防の貿易額は、西貢に亞いで佛印第二の輸入港である。支那の雲南等に入る商品は同港を経由する(海防は雲南鐵道の起點)。最も繁華な通りはポール、ペール通りである。

(2) 河内市 (Hanoi)

海防の西方百軒(鐵道で二時間)の距離にある雲南鐵道沿線の佛印總督府の所在地で、紅河に臨み





佛印縦貫鐵道の起點でもあつて、水陸交通の要衝であり、商工業並びに行政の中心地である。佛印の首都たる關係上河内には多數の官衙建造物がある。市街は佛人街及土人街とに大別することが出来る。前者は官衙街住宅街が主で、後者は商店街である。佛入市街は純フランス式にして非常に靜かである。就中公園、眞直な大アスファルト道路、綠滴たる並木等は人の眼を惹き熱帯にしては實に氣持の晴々する都市である。人口は十三萬四千で、内佛人は七千、支那人は四千五百、其他は殆ど全部土着安南人である。河内在住佛人は大抵軍人と官吏で商人は少い。日本人は僅々六十人で誠に寥々たるものである。河内市中には總督府・學校・博物館・劇場・圖書館・パストール研究所・極東學院・植物園・ブチーラツク湖等の名所が多い。最も繁華美麗な通りは海防市と同名のポール・ペール通で佛國式の明朗な建築は訪者の目を惹くに足るものがある。河内は實に平和な都市で、旅行者は當市に入つて眞に平和樂土に來たといふ感に打たれる。河内市佛人住宅街は日本では到底見られぬ程華麗で且つ閑靜・清潔である。尙帝國總領事館はブルヴァール・キヤルノに嚴立して居る。

(3) 南 定 (Nam-Dinh)

河内の東南九〇度の所にある佛印縦貫線の要驛にして紅河の支流に臨み、東京第三の都市である。同市は東京米の大市場であると同時に狩獵の中心地でもある。河内海防へは河水航路の便がある。又附近には觀光に價する寺院が頗る多し。

ロ、安南地方

安南は佛印の東部を南北に長く占める地方で大部分は緩やかな丘陵・山嶽地帯である。面積は佛印全土の四分の一に及び、海岸に接する故人口も比較的多い。都邑としては順化・ツーラーヌ等がある。

(1) 順化 (Hué)

佛印縦貫鐵道の要衝で香河に臨み海岸を距ること約十軒の地點にある。人口約四萬、うち佛人千五百、安南帝國の首都にして安南理事長官の駐在地である。香河の右岸には佛人街あり、附近には名高い寺院が多い。順化は安南の歴史を研究するには是非訪問すべきところである。

(2) ツーラーヌ (Tourane)

ソンハン河に面した安南第一の港で縦貫鐵道沿線の主要都市である。人口一萬四千。此處には有名な古代美術品博物館がある。

ハ、老樾地方

佛印の西北部を南北に細長く占め殆ど全部山地でメコン河が泰國との國境を作つて居る。同地方は森林が非常に豊富であるが、惜しいかな同地方には交通機關が皆無の爲未開發である。同地方産物は昔からメコン河が唯一の運搬路となつて居るが、同河は至つて難航なる爲當局は同河と安南海岸とを連絡せしむべく努力し、其結果現在ではメコン河谷と東海岸諸港を連繫する道路が三本も出來て居

る。然し乍ら鐵道の敷設を見ぬ限り老樾の經濟的發展は望めないと思はれる。老樾住民の大部分はタイ族で普通ラオス人と呼稱されて居る。都邑としてはヴィエンチャン・ルアン、ブラバン位である。

(1) ヴィエンチャン (Vientiane)

メコン河に臨む人口約七千人の舊城下町で、地方行政廳の所在地(理事長官駐在地)である。町内には寺院、圖書館等がある。安南海岸ベンツイ (Bentuy) 港への道路に連絡する佛印國道第四號の起點であり、また西貢との間には飛行便もある。

(2) ルアン・ブラバン (Luang-prabang)

メコン河と其支流ナム・カム (Nam Kham) 河との合流點に位置する史蹟に富む町で老樾唯一の王であるルアン・ブラバン王が居る。

ニ、柬埔寨地方

佛印西南部を占むる略正方形型の盆地にして中央をメコン河が流れて居る。西部は泰國及岩石多き泰灣に接す。人口は稀薄で百五十萬、其中柬埔寨人が大部分を占めて居る。而して人口の大半はメコン河流域其他佛印第一の大湖グラン・ラック (トンレサップ湖) 邊に住居す。農業の他に漁業が非常に盛んである。都市としてはプノムベンがある。

プノムベン (Pnom-Penh)

東埔寨の首府で人口約七萬。メコン河支流に臨む港市で、商業の中心地である。市街は佛人・支那人・土人の各街に分れ、佛人街は廣く、學校・劇場・圖書館等各種著名建築物がある。其他史的建造物(王宮等)が多い。尙ブソムベンは佛印唯一の世界的名所であるアンコールを訪れる際誰しも寄る所である。

ホ、交趾支那地方

佛印の最南端で面積は最も小さく全佛印の十二分の一に過ぎないが人口は全體の五分の一を占め、従つて密度の大なる點では佛印諸國中第一に位する。交趾支那はメコン河の作る大三角洲を有し實に佛印の一大寶庫である。特に米の産出量の豊富なることは驚くべきで交趾支那全面積の四分の一は水田に當り、世界第二の産額を有して居る。西貢からの米の輸出は年額百四十萬噸を越え佛印第一の輸出品となつて居る。其他ゴム・胡椒等の産額も多い。佛印領内で最も開發せられて居るのは此の地方で、従つて都市としても西貢・シヨロン等重要なるものがある。

(1) 西貢市 (Saigon)

交趾支那の首都にして佛印第一の都會で、西貢河口から六五浬の處に位置する港市である。人口は十二萬、内佛人は一萬人、經濟上の佛印の首府である。市街は佛人街と土人街とに分れ、佛人街は佛國式で區劃整然とし並木を有する美しい町で東洋の巴里とさへ稱せられて居る。總督及び植民地長官

官邸・劇場・市廳等の宏壯な建築物があり、また植物園・動物園も有名である。其他有力會社銀行等が多い。同市は港市としても佛印第一で、港の設備も良く貿易額は佛印全額の約八割を占め輸入よりも輸出港として重きを爲して居る。佛國郵船は本港を寄港地と定めて居り、又佛印縱貫鐵道の終點でもあり、西貢は實に海陸交通の一大要地である。尙東京との間には無線電話も開設せられて居る。因に同市に於ける在留邦人は數十名に過ぎない。

(2) シヨロン市 (Cholon)

西貢に接續する市で佛印第一の精米地である。人口は約二十萬もあり人口の多い點では佛印第一である。同市に於ては支那人が非常に勢力を有し、精米關係事業は殆ど全部支那人の手中にあるといつても過言でない。人口の過半数は支那人であり、隨て同市は佛印の大きな支那人町である。夜のシヨロンは一大不夜城を呈する。

二、名 所

イ、東京地方

(1) アロン灣 (Baie d'Along)

東京地方の北東部海岸は岩石頗る多く且無數の島嶼が點在して居る。アロン灣、通俗にベータロ

ンと謂はれて居る此灣は、海防より東北約三〇哩の無煙炭で有名な鴻基港の前面に展開して居る幅數十軒に亙る灣である。灣内には大小無數の奇岩怪石の島嶼が散在し、一大屏風の如き屹立せる海岸と共に豪放なる一大景觀を展開してゐる。雨に浸されて突起ある石、潮風に曝されて黒くなつた奇岩、之等の怪奇な石塊の間から咲出でた名も知らない植物の美しさ、岩間の水路を或は右に或は左に小舟で縫つて行く興趣は到底筆舌には盡されない。斯る雄大なる海の驚異は日本でも一寸見られないと思ふ。東京地方を旅行する人は是非一度は見物して置くべきものであらう。尙鴻基海岸は夏涼しく避暑地としても良いから夏季同地に滞留するのも好いであらう。又鴻基港に續くバイチャイ(Bai Chay)海岸は有名な海水浴場である。鴻基には勿論ホテルもある。

最後に海防からベトナムへ行くには、船と自動車の二方法があり、自動車ならば一時間半で鴻基に行けるから海防からは日歸りでベトナム見物も可能である。船は海防港を夜遅く發して翌朝鴻基着となつて居る。

(2) 東京平野

東京平野は紅河の作る大三角洲である。米作・玉蜀黍栽培に好適で、東京人口の大部分は此のデルタ内に住居してゐる。この平野には到る處に小湖・池・沼があり、又紅河の支流が貫流して居る。稲田が綠色に飾られる時、廣大なる平野に通ずる立派な道路を時速數十哩の自動車にて疾走するのも佛

印を識るによく、浩然の氣を養ふにも良い。天氣の好い日には是非一日ドライブを勧めたい。

ロ 安南地方

(1) サムソン 海岸 (Sam-Son)

佛印縦貫鐵道沿線要驛であるタンホア (Thanh-Hoa) より約二〇軒東方の海岸で、佛印の名高い海水浴場であつて、夏季には河内方面よりの避暑客で賑ふ。

(2) ダラト 避暑地

ダラト (Dalat) は安南の南部にあるランブアン (Lang-Biang) 高原中の最高所で、西貢より三百五十軒、順化より八百軒餘の距離にある。此地は海拔一五〇〇米で氣温涼しく、避暑地として有名で十二月頃より翌八月頃迄が避暑時期とされて居る。尙此地は各種觀光の中心地でもありホテル等の設備も良く行届いて居る。

ハ 老樾地方

現在、老樾に於ては觀光上著名な所は殆ど認められて居ない様であるが、夫は同地方が開發不充分で且交通機關の施設が皆無な爲である。衆知の如く、老樾地方はメコン河上流の地方であるが、同河上流に展開する神祕な峡谷、天目も爲に暗い鬱葱たる大森林、或は又岩をも穿つ激しい急流・瀑布等の雄大にして絶佳な景觀が隨所に存在してゐる。然し乍ら夫等の大部分が未知の地方にあるだけに未

だ探検冒険の範圍を脱してゐないので、一般旅行者の接近し得可き所ではない。

ニ 柬埔寨地方

アンコール廢趾 (Les Ruines d'Angkor)

是こそ佛印の國寶であり、恐らく東洋第一の佛蹟であらう。アンコール見物と言ふ目的だけの佛印旅行も充分意義ありと謂はれ、佛印へ渡航してアンコールを尋ねずして歸國する旅行客は眞に佛印を見て來たと言ふ権利が無いと迄謂はれて居る。歐米から遙々アンコール見物の爲に佛印を訪れる西洋人が毎年相當數あるにも拘らず日本の歴史家等の中で此處を見た者は極く僅であらう。

アンコールは西貢から約五六〇軒、プノムペンからは約三二〇軒の距離にあり柬埔寨の大湖グラントラック (Grand Lac) の北に位置する僻地である。其昔クメール人 (Khmers) が交趾支那デルタ及メコン盆地に住居して一大王國を成し、紀元九世紀頃今のアンコールの地を其首府と定め、爾來數世紀間は實に其全盛時代であつた。所が十二世紀の終頃他國人の侵入を受けて首府を奪はれ、アンコールは荒廢の第一步を印したのである。其後首府は十四世紀中頃泰國人によりて荒され、十五世紀には全く廢墟と化して了つた。斯くして本地方は久しき間放置せられたる爲め、野獸の住む鬱葱たる大森林の中に埋れて居たのを佛蘭西が印度支那を領有した後、一八六一年一佛人學者の發見する所となり、現在では國寶的建造物として河内極東學院が保存管理に當つて居る。

アンコールに現存の遺物は總て前記全盛時代に建設されたものである。右遺物の中最も重要なものはクメール王の居城地と夫を圍む各寺院で、後者にはベイヨン・パブオン・タブローム等の諸寺院及びアンコールヴァット大寺院がある。右居城地と各寺院とを總括してアンコールの遺跡と稱して居る。アンコールの遺跡はクメール王朝時代の文化を研究するには絶好の資料である。アンコールの遺跡を眼のあたりに見た時の感じを一言にして表すれば「偉大なる石造建築、精巧なる石壁彫刻」と言ふ事である。歴史學乃至考古學の素養又は豫備智識さへあれば尙一層面白く且研究的に見物する事が出來ると信する。

ホ 交趾支那地方

カプーサンージャツク (Cap Saint-Jacques)

カプーサンージャツク(サンージャツク岬)は最南端で西貢よりは水路で約九〇軒の距離にある。軍事上の要地で且又有名なる海水浴場であり、また避暑地としても好適であるから夏季には西貢からの避暑客で非常に賑ふ。西貢からは自動車便もある。

×

×

×

×

以上で佛印に於ける觀光視察旅行の主要地の説明を終つたが右は一般觀光者のよく行く周知の地のみを列舉したもので、此他見物すべき處は未だ相當にある。特に佛印の珍らしい種族居住地方は訪問

する價值がある。

尙最後に佛印へ旅行する以上は、時間費用に餘裕ある限り是非雲南迄行かれることを特に御勧めして置く。雲南は支那奥地の秘地で通常では決して行く機会が無いし、且滇越鐵道の絶景は餘りにも有名であるからである（勿論本旅行は日支間に平和到来後行ふべきである）。

主要避暑地表

×印は特に有名。

地名	備考
山	
×ポロール Le Bokkor	東埔寨カムボット(Kam-pot)より二〇軒
×ダラト Dalat	安南ラン・ピアン高原
×バナ Bana	安南ツララーヌより四〇軒
×チャパ Chappa	東京支那國境、ラオカイに近し
×タムダオ Tam-Dao	河内より八五軒
海	
×カプ・サン・ジャック Cap Saint-Jacques	交趾支那
×ケツプ Kep	東埔寨海岸
×ドソン Dason	東京
×ホンガイ ×Hongay	同
×サムソン Sam Son	安南
×ナーチャン Nhatrang	同

註II以上の地の若干は觀光主要地の項にて説明済

一〇 ホテル

佛印旅行者が入國すれば先づホテルの問題があるが、佛印のホテルを其經營者國籍により區別すれば次の四種となる。

- 一、日本人ホテル
- 二、佛人ホテル
- 三、土人（安南人等）ホテル
- 四、支那人ホテル

右の内（三）及（四）は室代食事費等が他の佛人ホテル等に比して低廉なるも佛人・日本人ホテルが存在する處では成る可く避けられる様に御勧めする。日本人の宿泊所としては日本人ホテル及佛人ホテルの方が（三）及（四）に比べると何かと便利である。

日本人ホテルだと言語の點で不自由が無いし、且日本食も出来、其他旅行事情等を尋ねるのにも便宜が多い。唯甚だ遺憾に思ふのは佛印に於ける邦人經營のホテルは北部地方の河内と海防に夫々一つづつ存在するのみで、しかもその收容人員は甚だ少いのである。従つて其他の都市では否が應でも佛

人經營の外國人ホテルに泊らざるを得ないのである。

佛印に於ける日本人ホテル名は次の通りである。

海防市——石山ホテル(64, Boulevard Bonnal, Haiphong)

河内市——小田ホテル(49, Rue Vieille des Tasses, Hanoi)

右日本人ホテルは數人を收容し得るのみで、宿泊料(食附)は一人一日三比弗程度である。食事は普通日本式である。

次に佛人經營のホテルであるが、流石は生活程度が高く、而も華美好きな佛蘭西人だけに當領の如き植民地のホテルでも仲々立派なものが多く收容力、設備、待遇等はとも日本人ホテルの夫れと比較にならない。

佛人ホテルの宿泊料は、都市と不便な地方とに依り夫々異なるも、都市の二、二流ホテルでは食附宿料ならば一人一日五、六比弗である。尙佛人ホテルは室借りだけでも食事だけでも出来、此の場合には、前記一、二流ホテルでは室代が大體一人一日三比弗、食事は朝(コーヒーにパン)五〇仙、晝及晩一、五〇—二、五〇比弗位の相場である。

ホテルの室を前以て一ヶ月間と定めて借りる(食附)ことが出来る。此の場合一日一日と借りるよりは安價となるから、旅行者が一ヶ月以上一定の場所に滞留する様な場合には此の方を選ぶ方が得策

である。尙此の場合に於ても日本人ホテルは佛人ホテル(大體一、二流所で月八〇比弗—一二〇比弗)よりも安い(ホテル滞在費は第一三参照)。

最後に佛印各都市、主要觀光・避暑地及其他、地方中心地等に於ける主要ホテルの一覽表を擧げて置く。

注意(勿論表は佛印の凡ゆるホテルを網羅したるものではなく、餘り旅行者に知られてゐない土地のホテルは省略した)

ホテル一覽表

(一) 東京地方

河内市(Hanoi)

ホテル名	經營者	室數	一人一日宿料(室代及食事代)	設備等より見たる等級
Hôtel Métropole	佛人	九〇	一人一ヶ月宿料 九、五〇比弗 (一人一ヶ月宿料 二四〇比弗)	一等
Hôtel Splendide	同	六六	七、五〇—一、二〇〇 (同一ヶ月宿料一八〇—二二〇)	一
Hanoi-Hôtel	同	三六	六、〇〇—九、〇〇 (一ヶ月一、二五—一、五〇)	二

Hôtel de France	佛人	四〇	(一ヶ月一七、五〇〇)	一
Hôtel de la Paix	同	三四	(一ヶ月一五、五〇〇)	二

海防市 (Haiphong)

Grand Hôtel du Commerce	同	六〇	(一ヶ月一七、五〇〇)	一
Hôtel de l'Europe	同	五九	(一ヶ月一七、五〇〇)	二
Hôtel Teston	同	三三	(一ヶ月一六、〇〇〇)	二

ドソン (Dason)

Grand Hôtel de Dason	同	四六	(一ヶ月一四、〇〇〇)	二
----------------------	---	----	-------------	---

鴻基 (Hongay)

Hôtel des Mines	同	二九	(一ヶ月一五、五〇〇)	二
-----------------	---	----	-------------	---

チャパン (Chapa) 山間避暑地

Grand Hôtel	同	四六	(一ヶ月二〇、〇〇〇以上)	一
-------------	---	----	---------------	---

Hostellerie du Fan-Si-Pan	佛人	三二	(一ヶ月一七、〇〇〇)	二
---------------------------	----	----	-------------	---

ランソン (Lang-Son) 支那國境要地

Hôtel de France	同	一〇	(一ヶ月一六、〇〇〇)	三
Hôtel des Trois Maréchaux	同	一四	(一ヶ月一六、五〇〇)	三

老開 (Lao-Kay) 雲南鐵道沿線支那國境都邑

Touring-Hôtel	同	一二	不明	三
---------------	---	----	----	---

タムダオ (Tandaao) 高臺にて有名なる避暑地

Hôtel de la Cascade d'Argent	同	六〇	(一ヶ月二三〇以上)	一
------------------------------	---	----	------------	---

(二) 安南地方

順化市 (Hué)

Grand Hôtel de Hué	同	七〇	(一ヶ月一〇、〇〇〇)	一
--------------------	---	----	-------------	---

ヴィン (Vinh) 縦貫鐵道沿線主要地

Grand Hôtel de Vinh	同	二〇	(一ヶ月一五、〇〇〇)	二
---------------------	---	----	-------------	---

ヌーラーヌ (Tourane) 縦貫鐵道沿線主要地			
Grand Hôtel de Tourane	佛人	五二	(一ヶ月九〇〇—一九、五〇〇)
サトナン (Sam-Son)			
Hôtel Reynaud	同	三〇	(一ヶ月九〇〇—一七、五〇〇)
キーノン (Quinhon) 縦貫鐵道沿線主要地			
Grand Hôtel de Quinhon	同	三六	(一ヶ月一七、八五〇)
バナ (Bana) 避暑地 (高臺)			
Hôtel Morin Frères	同	三〇	(一ヶ月一六、五〇〇)
ダラト (Dalat)			
Langbian Palace	同	三八	(一ヶ月一〇、〇〇〇)
Hôtel du Parc	同	七〇	(一ヶ月二四、〇〇〇)
Grand Hôtel de Dalat	同	三〇	不明
ヂーリン (Djiring) 觀光及び狩獵の中心地			
Hôtel du Braian	同	九	(一ヶ月一五、〇〇〇)

フアンチエト (Phanhiét) 觀光地			
Grand Hôtel	佛人	一二	(一ヶ月九、〇〇〇)
Hôtel de Ngoc-Lâm	同	一九	(一ヶ月一四、五〇〇)
ナーチャン (Nhatrang) 地方中心地			
Grand Hôtel Beau Rivage	同	二一	五、五〇〇—一〇、〇〇〇 (一ヶ月五分別)
Grand Hôtel de la Plage	同	一六	七、五〇〇—一〇、五〇〇 (一ヶ月五分別)
タンホア (Thanh-Hoa) 地方中心地			
Hôtel Reynaud	同	一〇	(一ヶ月九、五〇〇)
(三) 老 越 地 方			
ヴィエンチャン (Vientiane)			
Hôtel-Bungalow	同	一六	(一ヶ月一〇、〇〇〇)
ルアンナタン (Luang-Prabang) 地方中心地			
Hôtel-Bungalow	同	一二	不明
サヴァンナケート (Savanna Khet) 地方中心地			

Bungalow	佛人	四	不明	四
	タクヘク (Thakhek)	地方中心地		
Hôtel-Bungalow	同	八	不明	四

(四) 柬埔寨地方

アンコール (Angkor)				
Bungalow des Ruines	同	四八	一〇、〇〇〇—二二、〇〇〇 (一ヶ月一八〇—二四、〇〇)	二
シムレップ (Siemréap) アンコール附近の町				
Grand Hôtel d'Angkor	同	六三	一二、〇〇—一四、〇〇	一
The New Siemréap Hotel	同	二二	八、〇〇—九、〇〇	三
フントペン (Phnom-Penh)				
Grand Hôtel Manolis	同	四一	(一ヶ月一五、〇〇)	一
Hôtel Le Royal	同	五四	一二、〇〇	一
Hôtel du Centre	同	三三	不明	二

コンポンチヤム (Kompong-Cham) 地方要地				
Hôtel-Bungalow	佛人	一一	六、一八、〇〇 (一ヶ月九〇〇)	三
コンボントム (Kompong-Thom) 地方要地				
Hôtel-Bungalow	同	一〇	六、一八、〇〇 (一ヶ月九〇—一〇〇〇)	三
クラチエ (Kratie) 地方中心地				
Hôtel-Bungalow	土人(安南人)	八	五、五〇 (一ヶ月一二〇〇)	四
ケップ (Kep) 海水浴場				
Hôtel de la Plage	佛人	二三	六、〇〇 (一ヶ月一三〇〇)	二
ボコール (Bokor) 山間避暑地				
Hôtel du Bokor	同	三八	九、〇〇 (一ヶ月二二〇〇)	二
(五) 交趾支那地方				
西貢市 (Saigon)				
Continental-Palace	同	一三〇	八、〇〇—一五、〇〇 (一ヶ月一六〇—三〇〇〇)	一

Hôtel Majestic	佛人	一〇六	七、五〇一、五〇〇 (一ヶ月一〇一、八〇〇)	—
Saigon-Palace	同	六六	五、五〇〇 (一ヶ月一〇一、八〇〇)	—
Grand Hôtel des Nations	同	六八	五、五〇一、六、五〇〇 (一ヶ月八五、一、一〇〇)	—
Grand Hôtel d'Annam	同	八〇	三、五〇一、五、五〇〇 (一ヶ月六五、一、八五)	—
Hotel du Coq d'Or	同	二五	四、五〇一、六、〇〇〇 (一ヶ月九五、一、一〇〇)	—
Modern Hotel	同	二〇	五、〇〇〇 (七五、一、八五)	—
Pension du Building	同	四	五、〇〇〇 (一ヶ月一、二〇〇)	—

カトサンマニヤック (Cap Saint-Jaques)

Grand Hôtel du Cap	同	五六	六、〇〇〇 (一ヶ月一五、〇〇)	—
Hostellerie du Cap Saint-Jaques	同	二〇	五、〇〇〇 (一ヶ月一、二〇〇)	—

(以上)

一一 交通

佛印領内交通の發達は未だ遅れて居る。今國內交通を陸路・水路・空路及び交通機關に就て説明する。

一、陸路

佛印は前にも述べたる如く日本全土より遙かに廣大な國ではあるが、國の半分以上は山岳地帯で就中老撾及安南兩地方の大部分は森林鬱葱たる山地に依つて占められて居る。又平地にしても毎年雨季に洪水乃至浸水に襲はれる地方尠からず、斯る方面の道路・鐵道敷設工事には特に工夫を要する。右の如き自然的條件よりすれば佛印に於ける陸上交通路敷設事業が作業上面倒の多い事は免れない。併し佛印の陸上交通現狀が他國に比し甚だ遅延して居る事は、右自然的原因のみならず然らしむる所ではない。否夫れよりも佛本國が極東への關心餘りに急に失し、とかく佛印を省る餘裕を缺いた事、また佛印當局の資金難等も一層大きな原因であらうと思はれる。併し乍ら勿論今日當局としては「佛印の經濟的開發は先づ鐵道から」と云ふことを第一のモットーとして極力其の發展に努力しつつある。加へて一九三〇年以來佛印產業界を包んだ不況の雲も漸く離散打開の氣運に向ひ、佛印財政も愈々堅固になりつゝある有様で、當局の陸上交通進展の努力も、いよ／＼明日を期待される處多い。

次に鐵道・道路の現状に移る。

(イ) 鐵道

佛印領内既設鐵道の全延長は三三五九杆である。其の内外國から雲南行の唯一重要交通路たる海防—雲南の滇越鐵道（全長八五九杆）を除く他は全部國有鐵道である。國有鐵道の内最も重要なものは、河内—西貢の佛印縱貫鐵道（全長一七三八杆）である。同鐵道は工事難と資金難との爲めに全通遅延し、一九三六年十月ツイホア・ナーチャン間（Tuy-Hoa, Nhatrang）開通を以て同線計畫以來實に三十年目にして漸く完通するに至つた。此の佛印鐵道大幹線の完成は單に旅客輸送上の一エポックにとどまらず、又南北兩地方物資の運搬、東京及北安南人口の交趾支那移植等々の點より見るも頗る有意義なるもので佛印の前途に多大の光明を投じたものと云ふべきであらう。

尙ほ一九三八年末現在の鐵道幹支線は次の如くである。

國有鐵道		雲南鐵道會社線	
河内—西貢線及支線 (内、河内—西貢間)	一、八六六 ^杆 一、七二九 ^〇	海防—老開	三八四 ^杆 〇
河内—ナチャム線	一八〇 ^〇	老開—昆明	四六四 ^〇
西貢—ミート線	七〇 ^〇		
		註	本區間は老開、河口間の鐵橋爆破の爲現在（一九四〇年）は中断されてゐる。

ベンドンソーロクニン線	六九 ^〇		
ブナムベン—モンコロレイ線	三三九 ^〇		
計	二五二四 ^〇	計	八四八 ^〇
總計			三、三七二 ^杆 〇

以上が現在佛印鐵道の概観であるが、當局は目下未通線の完成・新線敷設計畫に極力盡力中である。

(ロ) 道路

佛印領内に鐵道を敷設することは上述の如く資金上多くの困難を有する爲め、總督府は鐵道は出來得る限り道路によつて補足すべく努め、其の結果道路は鐵道よりも進歩の跡を見せて居る。例へば老樾の如きは鐵道は殆んど皆無なるに引きかへ道路の發達には可也見るべきものがある。

佛印の道路は之を國道及地方路に大別し得る。前者は一般豫算、後者は地方豫算（佛印聯邦各國の豫算）によつて維持される。現在佛印の右兩道路全延長の合計は三萬四千杆に達し其内國道は一萬杆近くを占めて居る。國道及地方道路の大部分は自動車交通極めて容易で日本の道路などの遠く及ばぬ所である。國道及地方道路の中にはアスファルト敷のものが全延長の五分の一以上に及ぶ程で、此の點當局の努力が想はれる。

現有國道二十二本中最も長く且つ重要なのは、支那との國境から縦貫鐵道と平行して泰國との國境に至る全長二五六軒の國道第一號である。尤も鐵道の全通により本道路の重要性は少しく減じたこととは否定出来ない。併し乍ら、云ふまでもなく鐵道の發達不充分なる佛印現狀にあつては、道路と旅行とは極めて關係深いものなのである。

二 交通機關(乗物)

(イ) 汽車

佛印の汽車は孰れも狹軌單線で、日本の夫れに比較すると甚だ不備で、外國人旅客としては二等以上しか良い乗心地がしない。等級は四等迄あるが外國人は四等乗車を認めずとの規定ある故三等以上に乗らねばならぬ。

(ロ) オートカー(レールカー)

雲南鐵道にはオートカーが汽車の他に運轉されて居るが此れは相當乗心地がよい。

運行狀態

一九三八年現在に於る主要線の運行狀態は左の如し。

區 間	所要時間	運行回数	主要通過驛	記事
河内—西貢	四〇・三〇分	毎日一往復	ヴイン、ユエ、ツラライヌ、ナーチャン、モングマン	急行
河内—ナチャム	六・三〇	二往復	ランソン	普通
海防—河内	二・〇〇	五往復	ハイドン	オート・カー
河内—老開	一〇・〇〇	一往復		急行
同 右	一〇・〇〇	毎週一往復		オート・カー
ブノムベン—モンコルボレイ	八・〇〇	毎日一往復	バタンバン	急行
河内—ダラト	四一・三〇	一往復	ヴイン、ユエ、ツラライヌ、ナーチャン、ツアチャム	急行
西貢—ダラト	一一・三〇	一往復	モングマン、ツアチャム	普通

切符の有効期間は百軒迄は五日間、以上百軒又は其端數毎に一日を加へる。子供の乗車賃は、満三歳未満は無料、三歳から七歳迄は半額、七歳以上は大人となつて居る。

(ハ) 電車

電車は河内及西貢の兩市に存するのみで何れも三十軒足らずのもの、一般交通機關として重要性は無く唯土人のみに利用されて居る現狀で設備も土人用である。外國人で乗るものは殆んど見受けられなす。

主要驛相互間運賃表

(單位ピアストル—邦貨約一圓)

自 至	等 級	西 貢 Saigon		河 内 Hanoi		プノム ペン Phnom-Penh	
		片 道	往 復	片 道	往 復	片 道	往 復
西 貢 Saigon	1			* 103.68	155.52		
	2			69.12	103.68		
	3			25.92	38.88		
河 内 Hanoi	1	* 103.68	155.52				
	2	69.12	103.68				
	3	25.92	38.88				
海 防 Haiphong	1	* 109.80	164.70	6.12	9.18		
	2	73.20	109.80	4.08	6.12		
	3	35.45	42.82	1.53	2.30		
順 化 Hué	1	* 62.40	93.60	* 41.34	62.01		
	2	41.60	62.40	27.56	41.34		
	3	15.60	23.40	10.34	15.51		
ダ ラ ト Dalat	1	* 27.00	40.50	* 96.30	144.45		
	2	18.00	27.00	64.20	96.30		
	3	7.80	11.70	24.08	36.12		
老 開 Lao-Kay	1	* 121.44	182.16	21.09	31.59		
	2	80.96	121.44	15.24	22.56		
	3	30.36	45.54	7.23	11.27		
ナチアム Nacham	1	114.42	171.63	10.74	16.11		
	2	76.28	114.42	7.16	10.74		
	3	28.61	42.92	2.69	4.04		
モンコルボ レイ Mongkol- borey	1					19.86	29.79
	2					13.24	19.86
	3					4.97	7.46

(*印區間の一・二等運賃には搬運料金を含む)

私營軌道

佛印に於ける私營軌道は自動車・人力車等と競争的立場に置かれてゐる爲に大なる發展も爲さず、又既存の路線も業績は香しくはない様である。

次に一九三八年現在に於ける路線名、料程を掲げる。

線 名	料 程
河内市街電氣軌道線	二九料
西貢、シヨロン電氣軌道線	六料
シヨロン、ホツクモン、ツダウモ線	八一料
ホンゲイ運炭線	三五料
合 計	一五一料

(二) 自動車

自動車は當領交通機關の王座を占めるものである。之は道路が鐵道より發達して居る點より見れば當然のことである。従つて自動車に依る交通者の數は年々増加し車臺數も現在は約五萬臺と見て差支なからう。

併し、當領の自動車は殆ど全部家用である爲め旅行者は貸自動車屋にて借りるより他に仕方がな

普通一軒に付七仙程度であるが出發地に歸らない時は此限りではないから、實際に交渉して見なければ分らない。七仙は唯大體の標準を示すに過ぎぬ。

尙ほ現在の佛印旅行は自動車に負ふ所頗る大なる實情にあるので河内、西貢等を中心地として各地主要地間に乗合自動車の定期交通が經營されて居る。

乗合自動車は鐵道の便宜の無い處に特に良く利用されて居る。今佛印に渡來する外國旅行者に最も重要な二、三の定期乗合自動車便の料金と時間を擧げて置く。

一、西貢・ブノムペン間(毎日)

西貢出發午前六時 ブノムペン着十二時(正午)

ブノムペン發午前六時 西貢着正午

料金は片道九・六〇比弗 往復二七・五〇比弗

一、ブノムペン・アンコール間 三三二軒(週三回)

ブノムペン發(火、木、土)午前六時 アンコール着午後四時九分

アンコール發(月、木、土)午前六時三十九分 ベノムペン着午後四時半

料金片道二二・八〇比弗 往復二三比弗

本線は西貢から一人でアンコールへ行く時などに利用すべきである。貸自動車は一人では高價に失する。

一、ドンホイ・サヴァナケット間(週一回)

一、ドンホイ・ターケーク・ヴィエンチャン間(週一回)

最後の二線は普通の旅行者には餘り關係のないものであるが、老樾へ唯一の定期乗合自動車線である。尙右二線の内、後者は途中メコン河上の舟便(ターケーク・バンタボック間)を含んで居る。本線の時間表及び料金は茲には省略する。

經營はS.I.T (Societe Indochinoise de Transports)その他に依り行はれ、尤もその運行區間は季節に依り異なるが年中無休止に運轉される區間と、五月から十一月、又は十二月から四月迄の間運轉される區間とに分けられる。

左に掲げるのは主要地間貸切、及びバスに関する情報一覽表である。

發地名	着地名	經由	所要日數	料程	貸切自動車料金	バス料金(一臺分)
西貢	ターナ		一日	二〇〇軒	ピアストル 二五	ピアストル 五〇
ターナ	ラーニヤ		一日	二〇〇	三五	五〇
ターニヤ	ダラト		二日	六〇六	八〇	一〇

フアンチエツト	ナーチャシ	ツォラーヌ	順化	河内	海防	ブノムベン	レナム	アンコール	アランヤ	アランヤ	西貢	アンコール	コンボンチャム	四日	一、四三〇	一六〇	三七〇
二日	三日	五日	五日	二日	二日	二日	二日	二日	二日	二日	二日	二日	二日	二日	二日	二日	二日
三九六	八八三	一、九四八	二、二五八	三、四六六	三、四六六	四八〇	九七四	一、一〇〇	一、二八〇	一、五二〇	一、三二〇	一、四三〇	一、四三〇	二、二八〇	二、二八〇	二、二八〇	二、二八〇
五〇	二一〇	二四〇	二七〇	四二〇	四二〇	五五〇	一一五	一二五	一四五	一七〇	一四五	一四五	一四五	二一五	二一五	二一五	二一五
一〇五	三三〇																

(ホ) 人力車

人力車は佛印都邑内の交通機關として缺くべからざるものである。河内・海防・西貢等市内の見物乃至交通には簡便で安價な此の氣持良き乗物を利用すべきである。

三、水路

水路は之を海路・河川路及運河路に分け得る。海路に關しては佛印の北部に海防、南部に西貢の二良港以外に尙、小港乍らホンガイ・ベンツイ・ツォラーヌ・キノノン・ナーチャシ(北より配列)等を有し、之等は外國と交通する他、内國航路の要港でもある。

河川路に關しては常領には紅河及其支流、メコン河及其支流あり、此等は皆航行可能で國內交通運輸に役立つて居る。就中メコン河は實に昔から老樞交通の一大幹線となつて居る。河川港として有名なるものは北部の河内・海防(海港であると同時に河港でもある)・南定・南部の西貢(海防と同様)・ブノムベン・ヴィエンチャン・サヴァナケット・パタセ等であらう。最後に運河であるが東京及交趾支那兩デルタ内には河川間の連絡航行用及貨物運搬用として運河も相當開鑿利用されて居る。

佛印と佛本國との連絡は佛國汽船エム・エム會社(Compagnie de Messageries Maritimes)及びシャルジュール・レニエ會社(Chargeurs Réunis)に依つてゐたが第二次歐洲大戰開始以來之が運航が中止されてゐる。近海及び沿岸航路には佛國船の他、英國及び和蘭の汽船が就航してゐるが、現

在の處定期には運航されてゐない様である。
 主要航路は左の如くである。

會社名	區	間	運航回数	一等運賃
大阪商船會社	西貢—盤谷	月一回	月一回	九二・〇〇 <small>銀幣</small>
Indochina S. N. Co.	新嘉坡—西貢	二週一回	二週一回	五〇・〇〇 <small>銀幣</small>
The Siam S. N. Co.	盤谷—レナム	週二回	週二回	三三・〇〇 <small>チカル</small>
Société des Affrèteurs Maritimes Indochinois	新嘉坡—西貢	週一回	週一回	六三・〇〇 <small>銀幣</small>
K. P. M.	西貢—新嘉坡	月二回	月二回	一八・二五 <small>磅志</small>

註 銀(新嘉坡) 邦貨約 二圓〇一錢
 チカル 一圓五九錢
 磅 一七圓一〇錢

附 大阪商船 西貢盤谷線

就航船	區	間	所要日數	運賃	運航日數	噸數	收容人員	寄港地
盤西	橫濱—海防	西貢	一三日—五日	一等 一六・〇〇 二等 一三・〇〇 三等 一〇・〇〇	原	西貢丸	五・三五〇	名古屋、大阪、神戸、門司、基隆、海口、海防
盤西	西貢	西貢	一七日	一等 二〇・〇〇 二等 一七・〇〇 三等 一四・〇〇	則	西貢丸	五・三五〇	同右

谷貢	丸	神戶—海防 <th>門司—海防 <th>西貢 <th>基隆—海防 <th>西貢 </th></th></th></th>	門司—海防 <th>西貢 <th>基隆—海防 <th>西貢 </th></th></th>	西貢 <th>基隆—海防 <th>西貢 </th></th>	基隆—海防 <th>西貢 </th>	西貢
神戶—海防	〃	〃	〃	〃	〃	〃
八日	一二日	七日	四日	八日	一日	八日
三等	三等	三等	三等	三等	三等	三等
一五・〇〇	一五・〇〇	一四・〇〇	一〇・〇〇	一四・〇〇	一〇・〇〇	一四・〇〇
回一月テシト						
盤谷丸 一等 二〇 三等 一〇 (兩船共)						
門司、基隆、海口	同右	同右	基隆、海口	同右	同右	同右

大阪商船 日本海防線 (場合により西貢迄で延長する事あり)

あ	ぞり	な	丸	神戶—海防 <th>門司—海防 <th>西貢 <th>門司—西貢 </th></th></th>	門司—海防 <th>西貢 <th>門司—西貢 </th></th>	西貢 <th>門司—西貢 </th>	門司—西貢
神戶—海防	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
八日	七日	一三日	一二日	八日	四日	八日	一二日
三等	三等	三等	三等	三等	三等	三等	三等
一五・〇〇	一四・〇〇	一六・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇	一〇・〇〇	一四・〇〇	一四・〇〇
回一月テシト則原							
九・六四 一等 三元 特三 四〇 三等 三六〇							
門司、基隆	基隆	門司、基隆、海防	基隆、海防	同右	同右	同右	同右

佛國郵船會社 (M. M 汽船)

註 ありぞな丸に代つてらぶら丸を運航させる事があるが此の運賃はありぞな丸より幾分高くなる。

ダルトニア D' Artagnan		神戸—西貢		一三日	一等 二等 三等	四六五 三三三 二二二 (西米弗) (西米弗)	回一週六	一五、〇五	一等 二等 三等	二〇人 二六人 一〇人	上海、馬尼刺
----------------------	--	-------	--	-----	----------------	-------------------------------------	------	-------	----------------	-------------------	--------

右運賃には通行税を含みます。本邦内諸港発の場合は、各航路共に一等三圓、二等一圓五十錢、三等五〇錢の通行税が加算される。

四、航空路

現在佛印定期航空路には(一)大日本航空株式会社の經營する盤谷線、(二)佛國エール・フランス會社經營のもの、(三)中國航空公司經營のものとの三つがある。

(一)は日本泰國間の空路で福岡—廣東—臺北—河内—盤谷の各都市を結び、河内からは最近ツラーヌ・西貢經由盤谷へ通ずる空路をも開拓してゐる。

(二)は佛印と歐洲とを連絡するもので、即ち

ロンドン—バリ—マルセイユ—バグダッド—カルカッタ—ラングーン—盤谷—河内(以上都市は主要着陸地)を經由する線で盤谷から西貢へ支線もある。

但し此の國際空路は現在(一九四〇年)は中絶されてゐる。

従つてエール・フランス會社線の佛印領内航空路は

◎ハノイ・ヴィエンチャン・サイゴン間

◎ハノイ・サイゴン間の二線である。

次に最後の(三)は近年中國航空公司により開通せられたもので河内・廣東間を往復して居る。途中の着陸地は龍州のみである。

以上、佛印の既設定期航空路は現在上記三會社の經營する五本に過ぎない。

大日本航空株式會社盤谷線

飛行場	東京	福岡	那覇	臺北	廣東	河内	盤谷
料程	—	九五料	七〇料	七〇料	七五料	九〇料	一〇〇料
運賃	—	空圓	六圓	五圓	一〇圓	一五圓	二五圓
回数	一日一往復	一日一往復	一日一往復	一日一往復	往航每金曜 復航每水曜	往航每土曜 復航每火曜	—

東京—河内間は三三時間一〇分かかり四四〇圓である。

同様に大阪—河内は三二時間四〇分(四〇五圓)

福岡—河内は二八時間四〇分(三七五圓)

歐洲行は毎土曜日午前七時河内發、盤谷着は正午、マルセイユ着は七日目(金曜日)の午後四時四

十五分。又マルセイユ發佛印行は毎木曜日午前五時四十五分發、盤谷着は六日目(火)の午後五時半、河内着は翌日正午。尙西貢・盤谷線は勿論河内歐洲線に連絡するもので、即ち西貢發盤谷行は毎土曜日の午前六時發、盤谷着は同日午前九時十五分、又盤谷發西貢行は毎水曜日午前六時十五分發、九時半西貢着となつて居る。

料金(片道)は河内・盤谷間は一六九〇法、河内・マルセイユ間は一〇八七五法(西貢・マルセイユ間も之に同じ)、西貢・盤谷間は九〇〇法である。

次に支那廣東行は河内發毎土曜日、又廣東より河内行は毎金曜日發。

發着時は兩地何れも午前七時半發 午後二時着。

料金は河内・廣東間片道一五〇比弗

人力車

市内一軒十仙。時間制では一時間三〇仙。

一二 佛印領内旅行徑路

附 參考旅程費用概算

佛印への旅行を、觀光を目的とする旅行と、觀光以外の視察・調査・研究・商用等を目的とする旅

行とに分ち其各々に就き之を説明してみよう。

一、視察・調査・研究・商用等を目的とする旅行

此の場合の佛印領内旅行區域及滞在日數は各人が其目的達成の爲に銘々決定するものであり、費用も夫れに應じて異なる譯で茲には示すべき標準がない。唯費用概算の一基礎となるべき生活費の標準を示すことは出来る。則ち左の通り

▲都市に於ける一日の生活費(ホテル宿泊料及食費)は一人三比弗乃至七比弗(一、二流所では大體五、六比弗)と見て間違ない。

▲同じく一ヶ月の生活費(ホテルの一ヶ月食附間借りの場合。既述の通りホテルは一日毎の計算の他に一ヶ月間の期間を前以て定めて食附の間借りをすることが出来、費用も前者に比し經濟的であるから一月以上同一箇所滞在する場合には之を御勧めする)は一流ホテルで一人普通百比弗二流所で七、八十比弗となつて居る。

尙河内・海防の邦人旅館は佛人ホテルよりはるかに安い。

二、觀光旅行

(イ) 徑路

佛印へ旅行する以上は其目的が觀光である時は勿論、其他何にあるにせよ出来得る限り佛印の主要

観光地を一通り往訪して歸國すべきである。

而して當領内観光旅行の徑路は各人の好みに依り撰擇すべきではあるが、日本よりの佛印觀光客に御勧めしたき徑路としては普通一般的の

(1) 日本發↓海防上陸↓河内↓順化↓西貢↓ブノムベン↓アンコール↓ブノムベン↓西貢↓日本歸

着

(2) 右の逆(西貢上陸の場合)
を擧ぐることが出来る。勿論此れは一標準に過ぎず、此の他老樾方面へ旅行するもよし、又船便の都合で再び海防又は西貢へ戻り其處から歸國してもよい。而して又若し餘裕があれば河内から雲南旅行を企てることは更に良く、又佛印旅行後、泰國・シンガポールへと渡つて此處から郵船で歸國するの意義がある。即ち西貢からアンコールに出て、それから國境を経て泰國のアランヤに入ることが出来、而かも此の徑路は一部自動車一部は汽車に依ることが出来て便利である。尙亦更に蘭領印度方面を廻つて歸還すれば尙更結構である。
以上は佛印を旅行目的地とした場合であるが佛印以外の泰國、蘭領東印度其他を目的とする場合にも此の地を通過される事を御勧めする。

(ロ) 日 數

滞在及び旅行日數の標準は大體左の如くである。

▲海防・河内・順化・西貢・ブノムベン及びアンコール等の見物は一日又は二日の滞在で充分である(尤も歴史研究等の爲めには順化及びアンコール等で相當滞在するを要するのは無論である)。

▲河内から雲南往復の場合は一週間の日數を見積つて置くが適當。

▲河内から順化經由西貢迄は鐵道で二日、西貢からアンコール往復は乗合自動車で四日を要する。

大體以上の通りで、之に依れば前記の徑路(但し佛印領内)で觀光するには二週乃至三週間を要することになる。

(ハ) 費 用

佛印觀光旅行に要する全費用は、日本・佛印間往復船賃、滞在生活費・交通費等を加算すれば概算出来るわけで後の二種の費用は前述のホテル代・交通機關料金等により大體計算が出来る。

通常、前記(1)又は(2)の徑路ならば大體五百圓(最近の爲替基準で)あれば二等(船車・宿泊)の觀光旅行が出来ると思ふ。勿論自己の小遣ひ其他の費用(船便の都合で待船を餘儀なくされた時の滞在費等)は右には加算してないから七百圓位は見積つて置くべきであらう。

以上要するに徑路・日數・費用の大體の標準を參考迄に示したが、要は各人が自己の旅行内容に従

つて夫々決定すべきである。

(二) 参考旅程と費用概算

便宜上、最も普通な徑路を採つて案を組んで置くが、之以外の徑路又は詳細の日程は當協會宛てに直接照會され度い。尙、自動車・一等汽車賃・見物費・ホテル・食事・荷物運搬費・入場料等を纏めた費用概算は現在の歐洲戰亂勃發以前の基準に據つた爲、最近の情勢激變に伴ひ物價その他の昂騰と相俟つて二、三割の費用増加は豫想しなければならない。

第一案 海防—西貢(一週間)

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第一日	午後	海防着	汽車にて河内へ		オテル・メトロポール		Hôtel Méropole	
	午後	河内着	自由行動		オテル・スプランズ		Hôtel Splendide	
第二日	午前		市内見物					
	午後	河内發	汽車		寢	臺		
第三日	午前	順化着	市内見物		オテル・モラン		Hôtel Morin	
	午後				オテル・ド・テラ		Grand Hôtel de Hué	
第四日	午前		自動車にてツロー		オテル・モラン		Hôtel Morin	
	午後	發	ヌ經由キノンへ		オテル・ド・テラ		Grand Hôtel de Quinhon	

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第五日	午前	キノン發	自動車にてダラトへ		ナーチャンにて晝食			
	午後	ダラト着			ランビアンパレス		Langbiang Palace	
第六日	午前		狩獵		オテル・ネーブルク		Hôtel du Parc	
	午後	ダラト發	自動車にて西貢へ		オテル・マジェスティク		Hôtel Majestic	
第七日			市内見物後乗船		コンチネンタルパレス		Continental Palace	
					サイゴンパレス		Saigon Palace	
					グラン・ド・テラ		Grand Hôtel des Nations	
					オテル・デュ・コク		Hôtel du Coq d'Or	

第二案 西貢—海防(二週間)

費用
一人ノ場合
二人
三人

三三磅
四一磅
四九磅

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第一日		西貢着	市内見物		第一案第六日の項参照			
	午前	西貢發	自動車にてダラトへ		晝食		チーリンにて	
第二日	午後	ダラト着	狩獵		第一案第五日の項参照			

日次	時間	地名	記事	宿泊	食事
第三日	午前	滞在	自動車又は馬にてピク旅行		晝食付き
	午後	ダラト發	自動車にてナーチャン (バンメツオ經由)		
第四日	午前	ナーチャン	滞在 附近ドライブ	グラントドテルボーリツヴァージュ Grand Hôtel Beau Rivage	
	午後	着	自動車にてキーノン	Grand Hôtel de la Plage	
第六日	午前	ナーチャン發	自動車にてキーノン	第一案第四日の項参照	
	午後	キーノン發	自動車にてツラーヌ	晝食廣南(カンナイ)にて	
第七日	午後	ツラーヌ		オテルモラン Hôtel Morin	
	午後	着		グラントドテルボーリツヴァージュ Grand Hôtel de Tourane	
第八日	午前	ツラーヌ發	自動車にて順化へ	第一案第三日の項参照	
	午後	順化着	滞在		
第十日	午後	順化發	附近見物	第一案第三日の項参照	
	午後	順化發	汽車	第一案第一日の項参照	
第十一日	午後	河内着	市内見物		
	午後	河内發	汽車又は自動車にて ホンガイへ	オテルデーミックス Hôtel des Mines	
第十二日	午後	河内發			

第十三日	午後	ホンガイ發	ベイ・ダロン旅行		
	午後	海防發	乗船		
第十四日					

一人の場合
費用 二人〃
三人〃

五一磅五志
六四磅一五志
七八磅五志

第三案 西貢—アンコール—西貢(五日間)

日次	時間	地名	記事	宿泊	食事
第一日	午前	西貢發	自動車にてプロムベ		
	午後	着	見物	グラントドテルマノリス Grand Hôtel Manolis	
	午後	プロムベ發	自動車にてシアムレ	オテルローワイヤル Hôtel Le Royal	
第二日	午後	シアムレア		晝食 コムボントムにて	
	午後	着		グラントドテルマンコール Grand Hôtel d'Angkor	
第三日		滞在	アンコールの廢墟見物	ザニエーシアムレマンコー The New Siemréap Hotel	
				バンガロールに宿泊の場合は Bungalow des Ruines	

第五日	午前	午後	西貢着	安コール 發 (自動車にて西貢へ コンボンチャム經由)
-----	----	----	-----	--------------------------------------

一人の場合
費用 二人〃
三人〃

一六磅
二〇磅
二四磅

一三 佛印中心隣接國交通事情

左記の交通状態概説は現下の國際情勢に直接反映して、運航を中止し、又公表せずして運航してゐるものが多く、實際の事情を捕捉する事は非常に困難な爲、参考として掲ぐるに止めて置く。詳細はその都度當協會の案内所を通じて照會され度い。

(一) 佛印 泰國

イ陸路

區	間	種別	所要時間	運行回数	運賃
西貢—アノムベン	バス	六時間	毎日	運賃	九・六〇 ピアストル
アノムベン—アノコール	バス	一〇時間	火、木、土曜	運賃	一二・八〇

ロ海路

アノコール—アラシヤ	バス	三時間四〇分	毎日 (但シ五月—十月ハ週三回)	運賃	六・〇〇
アラシヤ—盤谷	鐵道	七時間四〇分	毎日	運賃	一二・七五

會社名	區間	所要日數	運航回数	一等運賃
大阪商船會社	西貢—盤谷	二日	月一回	九一・〇〇 円
The Siam S. N. Co.	レナム—盤谷	二日	週二回	三三・〇〇 チカル

ハ空路

會社名	區間	所要日數	運航回数	一等運賃
大日本航空	河内—盤谷	三時間五〇分	往復 毎土曜 毎火曜	二七五・〇〇 円

(二) 佛印 海峽植民地

イ陸路

區	間	種別	所要時間	運行回数	運賃
西貢—盤谷	佛印—泰國の項参照				

盤谷—チャンボン	鐵道	一一時間三〇分	水、土曜
チャンボン—ベナン	鐵道	一五時間	木、日曜
ベナン—新嘉坡	鐵道	二一時間	毎日
七三・一一 <small>銀幣</small>			

口海路 (一) 交通状態 中水路の項参照)

ハ空路

會社名	區間	所要時間	運航回数	運賃
大日本航空會社	河内—盤谷	三時間半	復往 毎土曜 復往 毎火曜	二七五・〇〇
K・N・I・L・M (和蘭系)	西貢—新嘉坡	五時間	復往 毎水曜 復往 毎火曜	一二九・〇〇

(三) 佛印 爪哇

イ海路

本區間を海路のみで旅行する事は現在の處不便である。戦前は英國系會社船も數航路あつたが目下直通連絡を行つてゐるのはK・P・M (和蘭系) のみの様である。而も回数は月一回である爲、順序としては前掲徑路に依り新嘉坡に至り此處で乘繼ぐのが一番便利である。但し、現在の情勢では馬來聯邦方面への入國手續が頗る嚴重を極めてゐる爲、大部分は禁止同様の状態である。因みに新嘉坡・バ

タピヤ間船賃はK・P・Mに依れば一等八〇フロリン、二等五六フロリンである。

口空路

直通の空路としては和蘭系のK・N・I・L・M會社の航空路のみである。

區	間	所要時間	運航回数	運賃
西貢—バタビヤ	二	九時間四〇分	復往 毎水曜 復往 毎火曜	二四九・〇〇

(四) 佛印 スマトラ

新嘉坡迄は前項参照

イ海路

新嘉坡からはK・P・Mが運航してゐる。

區	間	所要時間	運航回数	運賃
新嘉坡—ベラワンデリ	二	日	週一回	一等五〇フロリン 二等三〇フロリン

口空路

區	間	所要時間	運航回数	運賃
新嘉坡—パレムバン	一	時間三五分	復往 毎水曜 復往 毎火曜	六〇銀幣

パレムバン—メ—ダン—四—時—間—復往—每月土曜—一三二銀弗

一四 本邦から南方諸國廻遊参考旅程 附費用概算

現在の處、次に掲げる如き廻遊は諸種の事情に依り極めて困難であるが事態が回復して新秩序が設立され、明朗化した日を考慮に入れ、該方面旅行者の利便の爲此の一項を加へて置く。尤も、周遊、廻遊ではなく往復程度のもは問題ない譯である。尚費用概算の中汽車、汽船は一等、ホテルは一流の最低料金を基礎にして算出した。

第一案 日本—佛印—泰國—馬來—邦—爪哇—日本

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第一日	午 二・〇〇後	神戸	發	大阪商船汽船				
第九日	午 前	海防	着		グラン・ド・テル・デ・ニュー・コム・ス	Grand Hôtel du Commerce		
第一二日	午 九・〇〇前	海防	發		オテル・ドール・ローフ	Hôtel de l'Europe		
第一二日	午 一・三〇後	河内	着		オテル・メトロポール	Hôtel Métropole		
第一二日	午 一・三〇後	河内	發		オテル・スプランディッド	Hôtel Splendide		
第一五日	午 三・〇〇後	河内	發		オテル・ド・フランス	Hôtel de France		
第一九日	午 五・五〇前	順化	發	汽車	寢 臺			
第一六日	午 五・五〇前	順化	着		オテル・モラン	Hôtel Morin		
第二〇日	午 七・〇〇前	西貢	着	滞在	Grand Hôtel de Hué			
第二三日	正 午	西貢	發	バス	寢 臺			
第二六日	午 六・〇〇前	安コール	發	バス(火、木、土曜運轉)	オテル・マンオリス	Grand Hôtel Manolis		
第二七日	午 八・〇〇前	アランヤ	着	乗換	オテル・ロワイヤル	Hôtel Le Royal		
第三〇日	午 四・〇〇後	盤谷	發	汽車(水、土曜運轉)	オリエントホテル	Oriental Hotel		

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第一六日	午 五・五〇前	順化	着		オテル・モラン	Hôtel Morin		
第一九日	午 五・五〇前	順化	發	汽車	寢 臺			
第二〇日	午 七・〇〇前	西貢	着	滞在	Grand Hôtel de Hué			
第二三日	正 午	西貢	發	バス	寢 臺			
第二六日	午 六・〇〇前	安コール	發	バス(火、木、土曜運轉)	オテル・マンオリス	Grand Hôtel Manolis		
第二七日	午 八・〇〇前	アランヤ	着	乗換	オテル・ロワイヤル	Hôtel Le Royal		
第三〇日	午 四・〇〇後	盤谷	發	汽車(水、土曜運轉)	オリエントホテル	Oriental Hotel		

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第三一日	午 六・〇後	ビナン着	滞在					ペニミードーホテル Pennymede Hotel
第三四日	午 九・〇後	ビナン発	汽車	(毎日運轉)				
第三五日	午 五・〇後	新嘉坡着	滞在					ラツフルズーホテル Raffles Hotel アデロヒーホテル Adelohi Hotel
第三八日		新嘉坡發	K・P・M 汽船	(月、土曜運轉)				
第四〇日		パタビヤ着	滞在					オテルーデーザンド Hotel des Indes オテルーデーガラリイ Hotel des Galaries
第四三日	午 六・〇前	パタビヤ發	汽車					
第四五日	午 九・三前	着 シェリボン	滞在					オテルーシェリボン Hotel Cheribon
	午 九・〇前	發 シェリボン	汽車					オテルーリベリンク Hotel Ribberink
第四八日	午 一・〇後	スマラン着	滞在					オテルーベレウニ Hotel Bellevue
	午 七・三前	スマラン發	汽車					オテルーデーバウイリオン Hotel des Pavillion
第五一日	午 二・七前	スラバヤ着	滞在					オテルーオランジェ Hotel Oranje
	午 二・〇前	スラバヤ發	南洋海運汽船					オテルーブルネ Hotel Brunet
第六五日	午 前	神戸着						

費用概算

一人に就き

二、三八〇圓

第二案 日本—爪哇—スマトラ—馬來聯邦—泰國—佛印—日本

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第一日	午 四・〇後	神戸發	南洋海運汽船					
第一二日	午 一・七後	スラバヤ着	滞在					第一案第四八日の項参照
第一五日	午 五・五後	スラバヤ發	汽車					第一案第四五日の項参照
第一八日	午 九・二前	スマラン着	滞在					第一案第四三日の項参照
第二一日	午 〇・九後	着 シェリボン	滞在					第一案第四〇日の項参照
	午 〇・〇後	發 シェリボン	汽車					
第二四日	午 四・〇後	パタビヤ着	滞在					第一案第四〇日の項参照
第二六日		パタビヤ發	K・P・M 汽船	(水、土曜運轉)				
第二九日		パレムバン着	滞在					ホテルーバイズ Hotel Buys ホテルースマイツ Hotel Smit
第三一日		新嘉坡着	滞在					第一案 第三五日の項参照
第三四日		新嘉坡發	K・P・M 汽船	(毎月運轉)				

第三五日		ペラワン・ ペラワン・ Medanへ	汽車にてメダン 滞在	グランド・ホテル・メダン Grand Hotel Medan
第三七日	午後	ペラワン・ ペラワン・	M・P・M汽船 (毎木曜 滞航)	
第三八日	午前	ピナン着	滞航	第一案 第三一日の項参照
第四〇日		ピナン着	大阪商船汽船	
第七〇日		神戸着		

費用概算

一人に就き 二、六九〇圓

第三案 日本 佛印 泰國 馬來聯邦 蘭印 比律賓 日本

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第三三日		神	第一案参照					
第三四日	午後	ピナン	K・P・M汽船 (毎土曜 滞航)					
第三五日	午前	ペラワン・ ペラワン・	汽車にてメダンへ 滞航					第二案 第三五日の項参照
第三八日		ペラワン・ ペラワン・	K・P・M汽船 (毎土曜 滞航)					
第四〇日		新嘉坡着	滞航					第一案 第三五日の項参照
第四四日	午後	新嘉坡發	K・P・M汽船 (毎木曜 滞航)					

第四六日	午前	パレムバン		第二案 第二六日の項参照
第四七日		パレムバン	K・P・M汽船 (水、土曜 滞航)	
第四九日		パタピヤ着	滞航	第一案 第四〇日の項参照
第五二日		パタピヤ		第一案 参照
第六〇日		パタピヤ發	J・C・J・L汽船 (月一回滞航)	
第六九日		馬尼刺着	滞航	
第七三日	午後	馬尼刺發	日本郵船 (月一回 滞航)	マニラホテル Manila Hotel ベイヴューホテル Bay View Hotel
第八一日	午後	神戸着		

費用概算

一人に就き 三、一五〇圓

第四案 神戸 上海 香港 馬尼刺 爪哇 神戸

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第一日	午後	神戸發	東亞海運	日本郵船				
第三日	午前	上海着	滞航		アスターハウス Astor House 新亞細亞ホテル New Asia Hotel			

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第六日		上海發	J・C・J・L汽船					
第九日		香港着	滯在		ダロスターホテル (Gloucester Hotel)			
第一二日	午後	香港發	J・C・J・L汽船 (月一回位運航)		香港ホテル Hongkong Hotel			
第一五日		馬尼刺着	滯在					第三案 第六九日の項参照
第一八日		馬尼刺發	J・C・J・L汽船 (二週間に一回運航)					
第二六日		スラバヤ着	滯在					第一案 第四八日の項参照
第二九日		スラバヤ		第二案 参照				
第三八日	午前	パタビヤ發	南洋海運汽船					
第五六日	午前	神戸着						

費用概算

一人に就き 一、〇五〇圓

第五案 神戸—爪哇—新嘉坡—神戸

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第二三日		神戸		第二案 参照				
第二四日		パタビヤ發	K・P・M汽船(月、土曜運航)					
第二六日		新嘉坡着	滯在					第一案 第三五日の項参照
第二九日		新嘉坡發	日本郵船會社 (約二週間に一回運航)					
第四四日		神戸着						

費用概算

一人に就き 一、五〇〇圓

第六案 神戸—スラバヤ—パタビヤ—スラバヤ—神戸

日次	時間	地名	記	事	宿	泊	食	事
第一日	午後	神戸發	南洋海運會社汽船					
第一三日	午後	スラバヤ着	滯在					第一案 第四八日の項参照
第一五日	午後	スラバヤ發	汽車					
第一七日	午前	スマラン着	滯在					第一案 第四五日の項参照
第一七日	午後	スマラン發	汽車					
第一七日	午後	シエリボン着	滯在					第一案 第四三日の項参照
第一七日	午後	シエリボン發	汽車					
第一九日	午後	パタビヤ着	滯在					第一案 第四〇日の項参照

第二一日	午後七・五前	バタバヤ發	汽車	
	午後九・六前	ポイテンゾ	植物園見學	
第二二日	午後一・七後	ポイテンゾ	汽車	
	午後六・〇後	バンドン着	滞在	Grand Hotel Homann
第二三日	午後六・〇三前	バンドン發	汽車	
	午後七・〇前	チカムベツ	乗換	
第二四日	午後七・〇前	チカムベツ	汽車	
	午後二・〇三後	着		Grand Hotel de Djocja
第二五日	午後六・〇二前	發	汽車	
	午後一・〇元後	スラバヤ着		第一案 第四八日の項参照
第二七日		神戸着		

費用概算

一人に就き 一、一〇〇圓

一五 在佛印諸會社、銀行所在地

(一) 旅行會社

- (イ) 西貢
- Office Central du Tourisme Indochinois 22, Rue Langrandiere, Vaigon
 - American Express Company
 - Tourisme Vergoz
 - Head Office 80, Rue Verdun, Saigon
- (ロ) 河内
- Union des Syndicats Touristiques Nord Indochinois
 - 11, Boulevard Henri Riviere, Hanoi
 - Japan Tourist Bureau
- (ハ) 順化
- Bureau du Tourisme à la Residence Supérieure, Hue

(二) 汽船會社

- (イ) 大阪商船代理店
- (ロ) 海防
- Société Commerciale Française de l'Indochine, Haiphong
- (ハ) 西貢
- Mitsui Bussan Kaisha, Ltd.—
 - 41, Rue Lefebvre, Saigon, Cochinchine, Indochine Français
- (ニ) M・M汽船

(イ) 海防 — 57, Boulevard Paul-Bert, Haiphong
西貢 — Messageries Maritimes, Saigon

(三) 航空會社

(イ) K・L・M

(イ) 西貢 — (a) Air France (K.L.M. Head Agents for Indochina)

(イ) 西貢 — 98, Rue Catinat, Saigon

(イ) (b) Messrs, Diethelm & Co. 14, Rue Chaigneau, Saigon

(ロ) 大日本航空會社

(イ) 河内 — 76/78 Rue des Jeinturiess, Hanoi

(ロ) 西貢 — 目下(十六年一月現在)未定

(四) 銀行

(イ) 橫濱正金銀行 The Yokohama Specie Bank, Ltd.

(イ) 河内 — 43, Boulevard Henri Riviere, Hanoi

(ロ) 印度支那銀行 Banque de l'Indochine

(イ) 西貢, Hanoi, Haiphong, Hué, Phnom-Penh, Vinh,

Nam-Dinh, Tourane, Thanh-Hoa, Quinhon, Cantho,
Battambang.

(イ) 日佛銀行 Banque Franco-Japonaise

當行の支店は佛印領内にながが印度支那銀行に於て關係事務一切を代理してくれる。

(ニ) 香港上海銀行 Banque Hongkong Shanghai

(ニ) 西貢, Haiphong, Hanoi

(ホ) 佛支商工銀行 Banque Franco-Chinoise

(ホ) 西貢, Haiphong, Hanoi, Vinh, Tourane, Phnom-Penh.

「廣行
案内佛印事情」終り

社団法人 日本旅行協會

(ツーリスト・ビューロー)

東京市麹町區丸ノ内一ノ一 (電丸ノ内4141-6)

案内書

東京	東京驛降車口(北口)	京都	京都驛内
	東京驛乗車口(南口)		下京區四條高倉西入大丸内
	麹町區丸ノ内丸ビル内		驛前市設觀光案内所内
	神田區鍛冶町(神田驛前)	京都	東山區粟田口華頂町都ホテル内
	麹町區内幸町帝國ホテル内		中京區河原町京都ホテル内
	日本橋區室町三越内	大阪	大阪驛内
	京橋區銀座松屋内		東區安土町堺筋
	京橋區銀座六丁目		東區高麗橋三越内
	京橋區銀座2丁目東京鮮満支案内所内		南區心齋橋筋大丸内
	日本橋區通り1丁目白木屋内		南區心齋橋筋十合内
	日本橋區通り1丁目高島屋内		東區安土町鮮満支案内所内
	下谷區上野廣小路松坂屋内		南區日本橋筋松坂屋内
	四谷區新宿伊勢丹内		難波高島屋内
	淀橋區角筈三越内		北區中之島新大阪ホテル内
	澁谷玉電ビル内	神戸	三ノ宮驛内
横濱	中區海岸通横濱案内所		裏町大丸内
	中區伊勢佐木町野澤屋内	松江	白島本町尾原呉服店內
輕井澤	輕井澤驛内(夏期中)	岡山	下之町天満屋内
箱根	箱根宮ノ下富士屋ホテル内	吳	中通專門大店內
日光	日光町金谷ホテル内	高松	内町三越内
長野	横屋町	徳島	東新町丸新内
松本	松本驛前(夏期中)	廣島	八丁堀福屋内
静岡	田中屋内	下關	下關驛前
濱松	濱松市鍛冶町松菱内	門司	西海埠通鮮満支案内所内
名古屋	名古屋驛内	小倉	櫛町井筒屋内
	中區廣小路朝日ビル内	八幡	尾倉町九州百貨店內
	中區南大津町松坂屋内	別府	別府市大学別府北町
	中區榮町四丁目三星内	博多	福岡市東中洲町玉屋内
岐阜	柳ヶ瀬町丸物支店內		福岡市橋口町松屋内
福井	佐佳枝上町だるま屋内	久留米	日吉町旭屋内
金澤	片町宮市大丸内	大牟田	本町松屋内
富山	西町大丸内	熊本	安己橋通町千徳内
新潟	古町通六番町	長崎	長崎驛前

旅行佛印事情 定價 金七拾錢

昭和十六年五月十五日 印刷
昭和十六年五月二十二日 發行

發行所 東京市麹町區丸ノ内一ノ一
社団法人(日)本旅行協會
代表者 香月善次

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
杉山退助



昭和拾六年九月拾壹日

備考

製本控

旅行案内 佛印事情

917 函

24 號

年

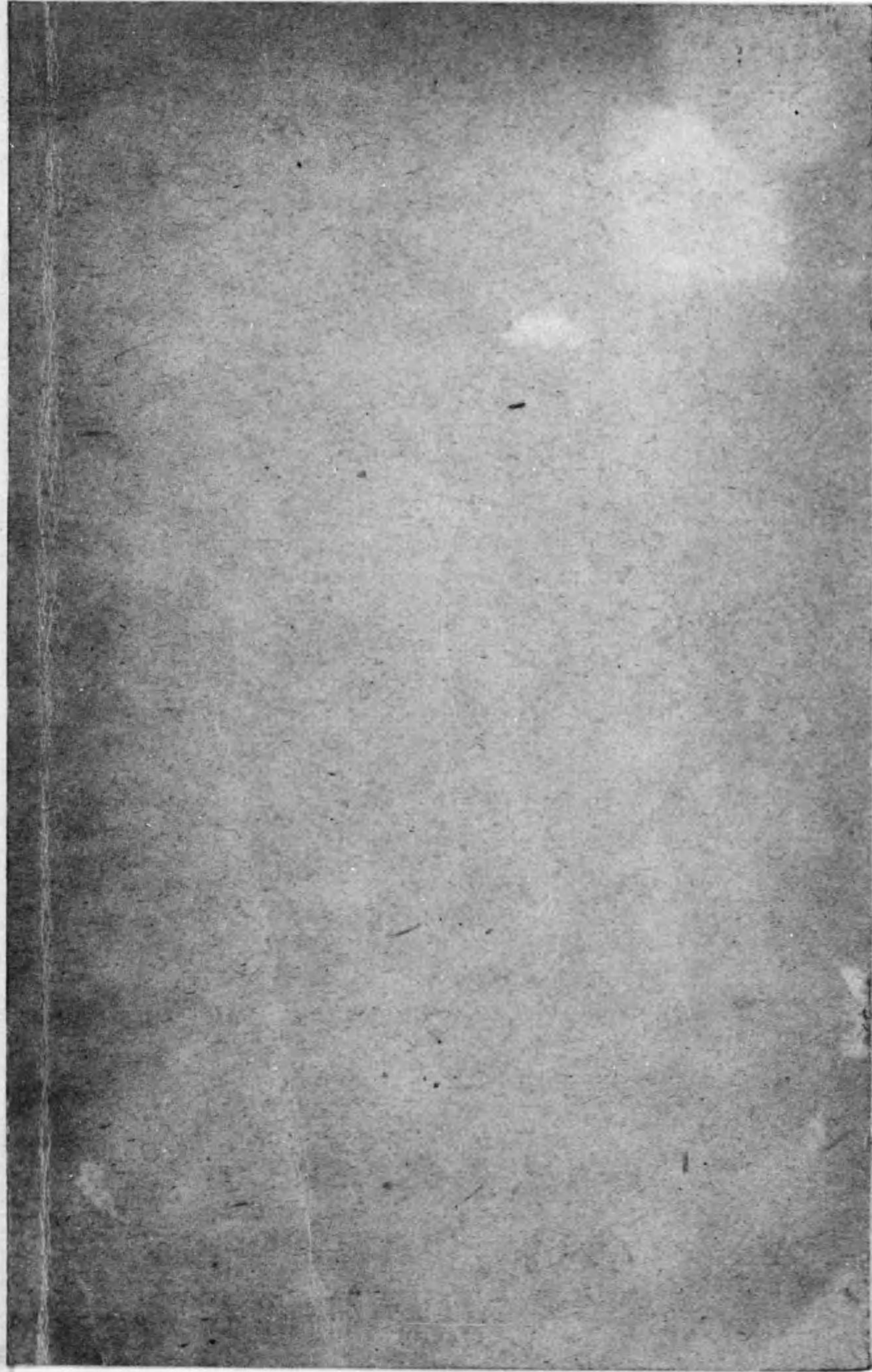
月

日

冊

- | | | | |
|-----|--|--------|--|
| 雲 仙 | 雲仙公園事務所内 (夏期中) | 吉 林 | 大馬路139 |
| 佐世保 | 榮町玉屋内 | 通 化 | 通化街南關 |
| 唐 津 | シーサイド・ホテル(夏期中) | 圖 們 | 春風路 |
| 鹿兒島 | 金生町山形屋内 | 延 吉 | 康平區進學路 |
| 福 島 | 大町中合支店内 | 營 口 | 南木街及舊市街永世街10 |
| 仙 臺 | 東一番丁三越内 | 撫 順 | 中央大街 |
| 盛 岡 | 肴町川徳内 | 鞍 山 | 北二條町 |
| 青 森 | 新町松木屋内 | 安 東 | 大和橋通2丁目 |
| 秋 田 | 上長町木内雜貨店内 | 哈爾濱 | 中央大街、地段街丸商百貨店内、傳
甸正陽大街、新市街車站街、ヤマト・
ホテル内出張所 |
| 函 館 | 末廣町今井商店函館支店内 | 牡丹江 | 太平路牡丹江ビル内 |
| 札 幌 | 南一條西2丁目今井商店内 | 佳木斯 | 南崗大街一號設地 |
| 小 樽 | 稻穂町東8丁目今井商店内 | 齊々哈爾 | 正陽大街 |
| 旭 川 | 一條通今井支店内 | 滿洲里 | 三道街ニキチンホテル内 |
| 釜 山 | 大橋通2丁目三中井内
釜山棧橋内 | 錦 縣 | 車站前 |
| 大 田 | 大田本町三中井内 | 承 徳 | 南營子大街 |
| 京 城 | 本町1丁目三越内、驛内京城觀光案内
所出張所、鐘路2丁目和信内、本町三中
井内、南大門通丁字屋内、朝鮮ホテル内 | 山海關 | 南關中街 |
| 平 壤 | 本町三中井内 | 北 京 | 崇文門大街、王府井大街、西單北大街、
前門大街、北京兵站内 |
| 大 邸 | 元町1丁目三中井内 | 天 津 | 日本租界旭街、東馬路南大街、驛前
驛内 |
| 咸 興 | 本町46三中井内 | 塘 沽 | 驛内 |
| 清 津 | 清津埠頭船客待合所内 | 張家口 | 橋東54 |
| 羅 津 | 昭和通2丁目 | 大 同 | 大東街 |
| 元 山 | 仲町三中井内 | 厚 和 | 舊城北門街内 |
| 新義州 | 本町朝鮮運送株式会社内 | 石 門 | 阜甯路 |
| 盛 北 | 榮町商品陳列館、驛内 | 保 定 | 西關大街 |
| 嘉 義 | 元町商工館内 | 太 原 | 首義門街 |
| 盛 南 | 末廣町1丁目林屋内 | 塘 沽 | 河北省塘沽溝沿街3號地出張所 |
| 高 雄 | 鹽埕町6丁目吉井百貨店内 | 濟 南 | 大馬路五〇七濟南驛前 |
| 花蓮港 | 黒金通 | 青 島 | 堂邑路、奉天路、會泉路 |
| 大 連 | 伊勢町、大連驛内、榮町大連連鎖街出
張所、常盤町三越内、大廣場 ヤマト
ホテル内出張所、監部通出張所、山縣
通二二四、大連山縣通臨時出張所 | 徐 州 | 月波街 |
| 奉 天 | 奉天驛前、城内小西門大街、浪速通ヤ
マトホテル内 | 開 封 | 相國寺後街 |
| 四平街 | 北一條通 | 上 海 | 北四川路1324號、四川路110號 新ア
ジアホテル内 |
| 新 京 | 北廣場(驛前)
大同大街三中井内
西四馬路泰發合内
中央通ヤマトホテル内 | 南 京 | 中山路1の1 |
| | | 蘇 州 | 北局蘇州百貨公司内 |
| | | 漢 口 | 江漢路 |
| | | 杭 州 | 新民路2區325號 |
| | | 香 港 | キングスビル内 |
| | | ○海外出張所 | 紐育、羅府、マニラ、柏林、プエ
ノスアイレス |

292.31
N776



終

